289-Su25-37
1200500732456

34.6 4

289
Su25
3

ラジオ新書 ☆72

南進論の先驅者菅沼貞風

花園兼定著

918
221

序

六月中、私は二三日風邪で臥床してゐると、放送局から手紙が來て、南進論の先驅者菅沼貞風の「大日本商業史」について五日間放送して欲しいといふことでした。貞風のことは、私が三年前、マニラに行つてその墓を訪ねてから、常に私の頭の中を去來してゐたので、いろいろの雜誌にも書いたし、私の隨筆集「洋學百花」の中にも書いたりしたのでしたが、かうして頼まれるのを幸ひ、お受することにしました。私は普通の商業史について話をする資格はないのですが、貞風の「大日本商業史」は、全く文明史であり、交通史であり、東西交渉史であるのでありまして、私は、その著述は私の愛讀書でもあり、尊敬措く能はざる述作の一つでもありますので、承諾することにしまして、翌日起きると、すぐその準備に取りかかりました。

私は、講演では、是非とも、マニラ郊外サンペドロ・マカチの墓地に貞風の墓を訪ねて感慨を深くしたことを語らうと思ひました。貞風は明治二十二年にマニラに赴き、歸國の後には、

大いに東亞の問題で活躍しようとしたのでしたが、マニラに在ること五ケ月、一夜客舍に病んで遂に亡つたのであります。その前夕、福本日南と貞風と他の三四のものと一室に集つて、生命保險の話が出ましたが、貞風も日本に歸つたら、自分も生命保險に入るつもりだといふので、日南は、何といふ氣の弱いことだといつてひやかしたが、貞風は、自分が死ぬと、あとには、まだ年少の弟がゐるばかりで、年老いたる兩親のことが氣にかかるからだといつたので、日南はその孝心の深いのに感心したといふことです。この事も、是非、講演で述べたいと思ひました。なほ、この「大日本商業史」の大著述が、僅か二十二三の青年の述作であることには、全く驚嘆させられるのです。貞風がマニラで亡つた時は、年二十五歳でありました。これは全く驚嘆すべきことで、われわれに取つても、今の青年に取つても、いい教訓であるから、この事は、どんなことをしても、くはしくいはなければならないと考へました。さうすれば、五日間のうち、初め第一夜は、貞風のことを語り、第二夜は貞風の時代を語り、あと三日で、「大日本商業史」の概略を語らうといふプランを立てました。貞風の時代を語るといふことは、放送局の依頼に依つたもので、まことに、それは至當なことだと存じました。それで、三日で貞

風の大著の大要を語ることの如何に至難であるかは、草稿を作つて見て感じました。貞風の書物は、太古時代、上古時代、中古時代、近古時代に分れて居りますが、太古と上古とをふくめて一日、中古時代を一日、近古時代を一日と割り振つて見ました。貞風は、マニラに赴くことを非常に切望して、つひに同期に帝大の古典科を出た齋藤坦藏氏から數百圓を得、福本日南と行を共にすることにして、事實は、日南より一足さきに出發したのでしたが、貞風の南方に對する興味は非常なもので、これも、貞風が平戸の生れで、平戸貿易史に興味を持ち、つひに「大日本商業史」を完成したことからも分るのですが、隨つて、貞風の著述で、最も骨を折つてゐる平戸長崎の貿易、ポルトガル、スペイン、オランダ、イギリス等と日本との貿易、臺灣のこと、鎖國に至る情勢を評論した近世について、二日を費したいと思つたのでしたが、それは結局出來ませんでした。そこで、今度この本にまとめる際、この部分をずつとくはしく述べることにいたしました。

この講演が終ると、いろいろの方々から熱情をこめた手紙を頂きましたが、武井大助中將から頂いたものは、全く私を感激させたのであります。主計總監の重職にあられるにも拘らず、

公務にさまたげられた日を除いて、聽いて下すつたとのことで、これほど私に力を與へて下さつたものはありませんでした。そして、貞風が心ひそかに心配した幼弟は後海軍に身を立てた周次郎少將で、元氣潑剌たる書を托し、その書を武井中將から私に贈つて下さつたのであります。それは、

俗情窮口食惟求
莫道無生萬事休
西海別存千丈氣
死猶呑吐五洋洲

といふ詩でありました。貞風がマニラで「舍弟尙ほ幼なり」といつた周次郎氏は、今は現職を退き、佐世保に西海學校校長として育英の事に身を獻げてゐられるのであります。これが緣となつて、幾たびか同氏からも御手紙を頂きました。

貞風の「大日本商業史」は、普通の記錄的歷史ではなく、南方發展といふ主張をするために書いたものであることは、この書の中に少くとも三四のところに於て、明記されて居ります。

しかも、百餘の文獻を一々引用した勞作なのでありまして、我が國に於て、商業史として最初のものなのであります。

勿論貞風が名を成したのは、この書が出版されてからで　明治二十五年の出版で、貞風が年二十五歲にしてマニラで客死したのは、明治二十二年七月六日でありました。隨つて、貞風死去の報が日本に傳へられたか、或はその遺骨の到着の記事でも新聞に出てはゐないだらうかと、當時の新聞を上野の圖書館で見ましたけれども、遂に發見することが出來ませんでした。

明治十六年大藏省關稅局、貿易沿革史を編するや、材料を長崎縣に求めたところ、當時、平戶の郡役所にゐた貞風が、その仕事を命ぜられたのが、貞風の研究の第一歩でありました。貞風は舊記を調べ、遺蹟をたづね、數ヶ月の後一書を成したものが、「平戶貿易志」であります。これが後「大日本商業史」の述作を剏戟したのであります、といふよりも、「大日本商業史」の原型みたいなものです。そして、「平戶貿易志」は、明治二十三年四月　皇上佐世保鎭守府に臨幸の砌、乙夜の覽に供されました。これ貞風死後のことでありました。

貞風が「大日本商業史」の中で、餘論として東亞を論じたるもの、全く今日を指せるが如き

ものがあります。貞風は、「歐洲の各大國が東亞細亞に於て、何等の事をなすも、また何等の問題を惹起するも、日本、支那の兩國は、始終その衝に當らざるを得ざるを見る」と、最後の擱筆に當り述べて居ります。貞風は、東亞に於て共同の運命といふことを考へてゐたのでありました。

この著述には、非常な熱意がふくまれて居りますけれども、論述は、極めて科學的でありまして、「史觀」といふ言葉が出來たのは新しいことでありますが、恰も、史觀といふ言葉が出來てからの著述の如くさへ見えるのであります。地政學的の見方もあり、民族學的の解釋もあり、言語學的の論述もあり、金石文學的の推論もあります。一卷を通して、著者の頭腦が極めて冷徹であつたことが分るのであります。

私のラジオ講演は六月二十三日から二十七日まで五日間の毎夜十時から十時二十三分までで、この五日間の講演を本にすれば、僅かに七十頁くらゐにしかなりません。それで、私は更に原著から補ふことにいたしました。この講演の前に、ちやうど恩師煙山專太郎先生からその近著「南方發展史」を頂きました。その中に、貞風の著書が非常な影響を當時の青年に與へた

ことが書いてありました。私は先生の本から、當時の日本の南方論について得るところ多大なるものがありました。貞風は、明治二十二年に死んだのですが、日支問題に深く心をひそめてゐました。漱石の「坊ちやん」の中にも出て來る「日清談判破裂して、品川乘り出す吾妻艦」といふ歌が盛んに歌はれた時分で、この歌は、明治二十七八年の日清戰爭の時の歌と誤解されるのであるが、實は想定の敵について作られたもので、作られた時は明治十八九年頃で、貞風は當時大學在學中でありました。「近來は貞風も支那との戰爭は好み不申候」と貞風は、同じく平戸出身にして貞風が兄事してゐた稻垣滿次郎氏への手紙でいつてゐます。この手紙は、明治二十年のものです。貞風の好むと好まざるとによらず、明治二十七八年の戰爭は起りました。けれども、もうその時は貞風はこの世にゐませんでした。貞風と同期に古典科を出た人で現存の人は、漢詩文の大家であり、書家として有名な京都の長尾雨山氏であります。貞風は慶應元年の生れですから、いま存命であるとしても、まだ元氣でゐることの出來る年です。今や變轉極りなき世界の渦卷の中にあつて、日本には南進論が嵐のごとく起つて居ります。そして、貞風こそは南進論の先驅者であり、或る意味に於て、その實行者でもありました。貞風がマニラ

に赴くや、それは單なる研究のためではなく、經綸のため赴いたのであることは、死する前夕、福本日南に向ひ、「吾、已に身を以て海外の事業に許す」といへることからも明かであります。

貞風の著書は德川の鎖國で筆を投じて居ります。全く筆を投じて長大息をしてゐる形であります。鎖國がなかつたならば、日本はもつと海外に發展してゐたにちがひないと著者は痛嘆してゐるのであります。貞風の著述と併び稱せらるるものは、横井時冬の「日本商業史」であります。横井博士の著は、明治三十一年の出版であります。最初講義錄として出たものでありますが、それにしても、貞風の著述より遲れてゐることは確かであります。横井博士の著述は、太古からのこともありますけれども、明治史と申してもよろしいのであります。貞風の「大日本商業史」と、横井時冬の「日本商業史」とを併せ讀むならば、日本の近代の經濟的發展について一貫した觀念を得ることが出來ると思ふのであります。

この序文を書きかけてゐた日の新聞は、文部省編纂の「臣民の道」が完成したことを報道しました。貞風が、「大日本商業史」を書かうとした目的が、「國を鎖して疆域の中に退歩するは、果して日本國民の本色なるか、是余の諸君と與に我國商業の歴史に就て、其如何に之を證據立

るかを見　と欲する所なり」としてゐることから明かであるやうに、歐洲各國が植民地獲得のための爭覇戰を特色とした近世史に於て、日本が立ちおくれたことを歴史によつて示さんとするのが、貞風の希望であつたのであります。文部省の「臣民の道」の「世界史の轉換」の一項が、まさに貞風の所說の概論として役立つてゐるので、ここにその一部分を轉載したいと存じます。

近世史は一言にしていへば、歐洲における統一國家の形成と、これ等の間に於ける植民地獲得のための爭覇戰との展開である。卽ち、近世初期にアメリカ大陸が發見せられ、それに引續いて歐洲諸國民は支那、印度等の遙かなる東亞の地へも、大洋の波を凌いで盛んに來航することとなつた。而してその全世界への進出は、やがて政治的、經濟的、文化的に世界を支配する端緒となり、彼等は世界をさながら自己のものの如く見なし、傍若無人の行動を當然のことのやうに考へるに至つた。

この侵略を歐洲以外の諸國はただ深い眠りの中に迎へた。南北アメリカもアフリカも、オーストラリヤも印度も、武力を背景とする强壓と、宗教を手段とする巧妙なる政策とによつ

て、瞬く間に彼等の手中に歸した。阿片戰爭によつてその弱體を暴露した支那も、また忽ちにして彼等の蠶食の地と化するに及んだ。我が國は、室町時代末より安土桃山時代にかけて、先づポルトガル、イスパニヤ等の來航に接し、後に鎖國政策によつて一時の靜安を得たけれども、幕末に至りイギリス、フランス、アメリカ、ロシア等の來航漸く繁きに會し、神州の地また安からざるものがあつた。

日本が西洋の文化を取入れ、次第に强大となり、巧みに、西洋の壓迫を斥けて來たことを、貞風は平戸の歴史、臺灣の史的關係等により說述して居りますが、私は、特にオランダ人築城のゼーランヂャ城址を見たいと存じまして、この本をまとめてゐた最中、暑中休暇を利用して、臺灣を旅行して來ました。卷末の「ゼーランヂャ城址に立ちて」はその時の感慨であります。

昭和十七年一月

著者

目次

序

南進論の先驅者「菅沼貞風」……一
一、菅沼貞風の人物……一
二、菅沼貞風の時代……一〇
三、貞風の幼弟その他……二〇
貞風の「大日本商業史」……三五
一、總論……三五
二、太古の時代……四〇
三、上古の時代……四四
四、中古の時代……五七

五、近古の時代……六五
附　錄
ゼーランヂャ城址に立つ……一二七
長　崎……一二九
マニラ日記から……一四三
菅沼貞風の墓に詣づ……一五一
著者略歷……一六〇

南進論の先驅者「菅沼貞風」

一、菅沼貞風の人物

偶然の原因が偶然の結果を生むことがありますが、私が先年早稲田大學の籠球部の選手と共に、マニラにまゐりまして、明治二十二年、僅か二十五歳で、マニラに於て客死した日本南進論の先驅者、南方强硬外交策の先唱者、大著「大日本商業史」の著者菅沼貞風のお墓に詣でたことから、貞風に非常に興味をもつやうになつたのであります。その前から私は、南方を經由した、日本に於ける洋學の發達に多少の興味を持つてゐましたので、よく考へて見まするならば、隨分前から菅沼貞風には親しみを感じてゐたのであります。

かういふ關係をたぐつて見ると、貞風が、マニラに赴く時、その費用の一部として數百圓を與へた齋藤頌藏氏は十年ほど前に、亡られましたが、貞風と同期に東京帝國大學の古典科を出

て早稲田大學で漢文學の教授をして居られまして、私は毎日のやうにその恩容に接してゐたのであります。

貞風と同期に古典科を出られた方で御存命であられるのは、京都にゐられる書家であり漢詩文の大家である長尾雨山氏であります。また貞風の故郷平戸に立てられた碑に漢文の碑文を書かれた岡次郎先生は、やはり貞風と同じく九州平戸の出身で、最近まで早稲田大學第一高等學院に奉職してゐられまして、私は非常に御懇意に願つた方であります。

もし齋藤先生御存命中に、菅沼貞風に關する私の興味が今日のやうでありましたら、その當時のことを詳しく伺ふことが出來たらうにと、それのみ殘念で御座います。

それからもう一つ殘念なことは、私がマニラに赴く時、マニラに行つたら、是非貞風の墓に詣でるやうにと、親しく私にお賴みになつた、平沼元首相の令兄であられた平沼淑郎先生も既にお亡りになつたことであります。平沼先生も貞風と同時代に帝國大學においでになつた方で後早稲田大學で商業史の御講義もなされ、貞風の著を激賞してゐられた方であります。

私はマニラに着いて四五日して、東京日日のマニラ特派員大谷純一氏につれられて、マニラ

郊外サンペドロ・マカチの墓地に、日本南進論の先覺者であるこの菅沼貞風の墓に詣でたのであります。私は曾てアメリカに居りました時、フィラデルフィアの墓地に故馬場孤蝶先生の令兄であり、當時新進の學者であり、憂國の志士であり、自由黨員として政治に活躍して重きをなした馬場辰猪の墓に詣でたことがありますが、馬場辰猪は明治二十一年にフィラデルフィアで歿し、貞風は翌年明治二十二年にマニラで亡つたのであります。

マニラにある貞風の大理石の墓石には、フランス語でサダカゼとありますが、普通テイフウと申して居りますし、岡次郎先生のお話でも、テイフウ、テイフウと申してゐたさうであります。幼名は貞一郎といつたのですが、明治十六年に貞風と改めたのであります。

道の曲り角を一度まちがへて自動車をすすめると、スペイン風の石の塀がありました。それがサンペドロ・マカチの英人墓所でありました。マニラ灣からマンゴーの樹を渡つて過ぎる風がすずしく、いささかのぼり氣味の石疊を行くと、左手にあります。

大理石　立派な墓で、南進論を說いた貞風は永久にここに眠つてゐられるのであります。私は寫眞を撮つたりして墓前に咲いた黃色い野の花を採つて、平沼先生へのお土產といたしまし

た。貞風のもう一つの墓は、いふまでもなく彼の遺著「大日本商業史」一卷であります。

昨年岩波書店から、この「大日本商業史」が再刊されたことは、南方問題の重大である今日、まことに意味深いことと思ふのであります。この著は恰も今日のことを豫想して書いたもののやうであります。

貞風は慶應元年九州平戸に生れて、家が貧しかつたので、郡役所で働いて、夜は伯爵松浦幹宇が舊藩の子弟のために興した猶興書院で漢學を講義したといふのですが、最初貞風は、この塾でいろいろの先生に漢學を學んだのであります。松浦伯につき、「人材を以て國家の根本と爲し、因つて力を敎育に竭し、異日の效用に備へ、猶興書院を創め、楠本端山をして其の敎を司らしむ、公子以下皆就學す（岡次郎、彪邨文集卷二）」とあります。

明治十六年、大藏省で貿易沿革史を作るにあたり、この史料を長崎縣に求めたところ、貞風が、平戸の資料を集めることを命ぜられたのであります。これらが後、貞風が「平戸貿易志」を著した所以で、氏の「大日本商業史」もこれがもとで筆を執つたものであります。

後、貞風は松浦伯の援助で東京に遊學し、明治十七年九月十七日に東京帝國大學古典科に入

學し、中村敬宇、島田重禮等に學び、明治二十一年七月十日に卒業、東京高等商業學校、今の東京商科大學に奉職中、「大日本商業史」を研究し、この著述が出版になつたのは明治二十五年で、貞風の亡つてから三年目であります。明治二十二年貞風はマニラに赴き、同地で年僅かに二十五歲で客死したのであります。

この著の出版をしたのが東邦協會で、この會頭は副島種臣、副會頭は前首相の父君であられた近衞篤麿であります。そして當時の評議員三十六氏の中で現存であられるのは三宅雪嶺、尾崎行雄、金子堅太郎、牧野伸顯の四氏に過ぎません。

貞風の「大日本商業史」は、六百三十三頁の大冊で、引用書目百八十餘に及んで居ります。貞風の歿年僅かに二十五歲、恐らくこの著は二十二三の頃の執筆と思ふのであります。大學に在るや常に圖書館に入つて、非常に多くの書物を渉獵したのであります。樋口一葉が二十五歲で亡つたと思ひ合せて天才の一生といふものを考へさせられます。

經濟史家田口鼎軒は、その大日本商業史　評に、此書は故人菅沼貞風君の著述である。私はこの本があまりに大きいのを見て、思ふ〻に、是は古い歷史の本をあつち、こつちと寫し取つ

たもに過ぎないだらう、ところが之を通讀すると、其識見の斬新なると、其渉獵の廣博なるを知り、轉ゝ追慕に堪へざるものあり、菅沼君の腦力は實にすぐれた頭だ、實に以て我邦の一大歴史家たるに適してゐる。然るに君、之れに甘んぜずして實利を國家に起さんと欲し、獨り呂宋に渡つてマニラに客死したのは國家のため誠に惜しいことである。終りに臨みて一言するが、現今我邦、商業史實に此著に如くものはない、といふ意味のことを記してゐるのであります。如何に立派な著述であつたかを知ることが出來ると思ふのであります。西村眞次博士は、その著「日本古代經濟」に於て「今日に於ては、史實の精確さに於て、或は彼を凌ぐことが出來るだらうが、彼の著述に磅礴してゐる氣魄を凌ぐことは容易ではない」と述べられて居ります。まことにこの書は、煙山專太郎先生が近著ラジオ新書「南方發展史」に於て、「菅沼貞風の大日本商業史は大いに國民の膨脹精神を煽揚するに力あつたものであつた」といはれた通り、この書の影響を受けた青年は實に多かつたであります。

貞風がどんな人物であつたかと申しますと、副島種臣は、「余嘗知貞風矯ゝ烈士之風あり」といつて居ります。

日南福本誠は、貞風最後の友人でありますが、初めて貞風が訪問した時のことを述べて、「其人を見れば、年正に二十四五、軀は小さいけれども、中々がつしりしてゐて事に堪ゆるの風があり、元氣な氣象は勃々として顔に溢れてゐた。」といつてゐます。

貞風が明治二十一年の夏、福本日南に會つた時に、貞風は「私は平戸の菅沼貞風といふものです。先生は對外關係の事に志があると伺つて居りますが、私も先生と所感を同じくするものであります。そのため敢ておたづねいたしたのであります。國の富を致すのは貿易が第一と存じます。また國威を立つるには外交より重要なものはない。だから國富を致し兼て國威を立てんと欲するならば、主として外交と貿易とを並び進めなければならない。今日の計たるもの、吾人海外に植民を樹て、兼て貿易を開き以て國富を致し外交を進むるの端を發するに在るのみだと考へます。」といつて、論難上下すること半日に及び窓外の日影が漸く傾くを知らなかつたといふことであります。日南が、貞風と相知つて、共に將來を期したのも實にここに始まるのであります。

貞風が呂宋マニラに赴かんとして準備中、急に病氣になり、一時重態であつたが、病氣が癒

つてから日南を訪ねたところ、日南は頻りに暫く靜養するやうにとすすめたけれども、「ただぐづぐづしてゐることは私の耐ゆる所ではない。今や氣力も舊に復したから、一足お先に出發いたしたいと存じます。」といつて、貞風はマニラに赴いたのであります。日南も　れから一ヶ月ばかり遲れて出發し。マニラでは同じ客舍に泊つたのであります。貞風も日南も一口に申せばマニラ經略の志を同じう致したのであります。貞風はマニラに行つて居ること五ヶ月、晝はいでて盛んに地理を視たり、夜は筆を執つてこれを記すといふ風で、研究一日も怠らず、將に歸朝の後、大いに爲すところあらんとしたのであります。

マニラに在るの日、一夜貞風、福本日南等三四人が一室に集つたところ、その內の一人が、「人間の命は明日にも分らない。保險はわれわれには必要だ。」といふのを貞風も側から僕も歸朝したら必ず生命保險に入るんだといふので、福本日南は大いに笑つて「男兒事を海外に計らうとするもの、青山曠野至るところ骨を埋むるに足るではないか。何だつて死後の計なんぞを考へるんだ」といつたのでしたが、貞風は「僕は既に身を海外の事業に捧げてゐる。たとへ魚腹に葬られようと、青山に骨を埋めようと撰ぶところでないが、ただ僕には二親があり、弟は尙ほ

幼く、僕にして一旦兩親に先立たば、誰が兩親の面倒を見て呉れるだらうか。」といつたので、日南は貞風の孝心の深いのに感心したのであります。ところがその晩、劇しく日南の寢室の戸を叩くものあり、戸を開けば、貞風がそこに倒れてゐたのでした。

急に人を四方に馳せ、醫者を呼んだりしましたけれども、翌朝となつては、貞風は最早この世の人ではなかつたのであります。

日南はこの著に菅沼貞風傳を書いて、以上の事柄を雄渾な筆に托して傳へ、君の志操堅固で、貧乏と戰ひ、自分の信念を決して曲げなかつたことを書いて居ります。そして君の「大日本商業史」は後の有爲の人を奮起せしめ、また一片サンペドロ・マカチの岡の上の墓石はまた後の感慨深い人々に對して泣涕憤慨せしめて、君が所謂「眞韮之麻足以繫日本之旗」といふ機會を作り、以て君が英靈を地下に慰めるの時が必ずあるに違ひないと、いふことを書いて居ります。この詩句に言ひ表されたやうに、後日本人の勢力がダヴァオに及んで、マニラ麻の栽培が殆んど全く日本人の手になるやうになつたのであります。

この句は貞風が呂宋に赴くに當り、諸友に示した賦の最後の一句でありまして、

「西土密雲近雨期、恰是咬龍飛躍時、苟能一變攻守勢、眞韮之麻足以繫日本之旗、」といふのがそれであります。以て貞風の意氣想ふべきであります。

二、菅沼貞風の時代

日本南進論の先驅者、菅沼貞風は年僅か二十五歳で、明治二十二年七月六日マニラで客死したのであるが、明治二十二年といへば、いふまでもなく帝國憲法發布の年であり、東海道鐵道本線の全通した年であり、外務大臣大隈重信が十月に狙撃された年であります。

貞風がマニラに去つたのは、明治二十二年の四月で、その月は我が國では、條約改正案に對し世論の沸騰した時でもありました。伊藤博文が保安條例を出したのが明治二十年十二月で、その時、尾崎行雄、星亨等が退去命令を受けたのであります。貞風がマニラに赴いた明治二十二年には、日本主義を標榜した日本新聞が現れ、當時の自由主義並に歐化主義に反對したのであります。その前年の二十一年に、東京朝日と大阪毎日新聞とが生れ、全然政黨的傾向を離れ

た新聞が出るやうになつたのであります。まことに日本國內に於ては思想上の爭が深刻であつたのであります。ちやうど、これらの爭を一先づ切拔けて、日本がこれから大いに進展せんとした時に、貞風は　志を抱いてマニラに赴いたのであります。

貞風は「大日本商業史」のやうな學問的著述を殘したけれども、そのマニラに赴くに當つては、必ずしも學問的研究といふばかりでなく、大志を抱いて南方に赴いたものと考へられるのであります。

明治二十三年に平民主義を標榜した德富蘇峰の國民新聞が出たことから見ても、一方我が國は國民主義の大いに擡頭した時であり、貞風の如きは、一敎授たり、一著者たるに滿足出來なかつたことと考へられます。

貞風の生れた平戸の地からは、志士の如き人物が多く輩出して居ります。臺灣から蘭人を追拂つた鄭成功、所謂國姓爺の母は平戸の田川氏でありました。日露戰爭の際、鐵橋破壞を企て、ハルビンの露と消えた沖禎介も平戸の人でありました。

貞風は學を平戸で楠本端山に受けたのですが、不思議に沖禎介も端山の門に學んだのであり

ます。また貞風の友で浦敬一あり、共に平戸城址に立つて俯仰感慨、嘆じて曰く「何ぞ今の人、地と共に寥落せる」と。敬一は支那に游び西域に入り行くところを知らず。君もまた貞風と海外に功を建てるを約したのである。そして浦敬一もまた端山に就いて學べるものであります。

貞風がマニラに行かうとして、奔走した時のことを想像して見ると、詩人石川啄木が、アメリカに行かうとして、いろいろの人達に長い手紙を書いたりして、衷情を訴へたことを思ひ合されるのであります。啄木は遂にアメリカに行く機會がなかつたけれども、啄木の詩には貞風の如く貧乏の中にも屈せざる闘志滿々たるものがあります。

貞風の思想は積極的な膨張主義でありまして、德川時代に、何故日本は比島その他に進出しなかつたかを慨いて居ります。貞風は所謂道德的なことばかりいつてゐては日本は到底歐米と角逐することが出來ないといふやうな考さへ披瀝してゐます。

貞風が見てゐた東洋の世界は、比島はまだスペインの領有下にあり、安南、東京を明治十八年にフランスは攻略し、ビルマは英領となつた時分で、アメリカがフィリッピンを領有したのは、明治三十一年、一八九八年であつたのでありますか、貞風がもし十年生きのびて米國の比島

領有を見たならば、どんなに悲憤慷慨したことでありませう。

貞風は明治二十二年に死んだのでありましたから、二十七八年の日清戰爭も知らなければ、米國の比島領有の原因となつた明治三十一年の米西戰爭も知らなかつたのであります。歐洲列國が、かういふ風に盛んに東亞の天地に侵入して來ましたので、日本の中にも南進論を說くものも起り、日本もニューギニアに植民をすべきだとか、カロリン、マリアナ等の諸島を買取つたらどうかとか、ボルネオを買收しろとかいふ議論も出ましたけれども、議論だけで實際的な反響は生れませんでした。それには日本人の中には議論をするよりも先づその地に赴いて土民の間に生活し、新しい環境を作り出すといふやうな人が缺けてゐたからでありませう。シンガポールの英國領有の基礎を作つたラッフルスにしても印度統治に功績のあつたヘースティングスにしても、土民の間に入り、土語を學び、土民の信頼を得て大きな事業を成就したのであります。遺憾ながら當時我が國にはかういふ人物を缺いてゐたのであります。

貞風と同じく平戸の出身であり、後にシャム、今のタイ國の初代公使となつた稻垣滿次郎へ宛てた貞風の手紙には「安南暹羅の如き、緬甸天竺の如き之を恢復して獨立せしむるときは、

以て東洋の元氣を皷舞するに足るもの亦少からず候、然れども是等は別に獨立の一國を組織すべき地にして決して我國天皇陛下の版圖に屬せしむべきものに無之と存じ候。然れば、近來は、貞風も支那との戰爭は好み不申候。又英佛獨逸などとも戰爭を好み不申候。唯我國の獨立をして、其の基礎を固からしめんと欲するには、西班牙、露西亞の二國とは一戰を決して避くべからざるかと存じ候、我國にして東洋の盟主となりて安南以下の諸國を獨立せしめむとするに至れば、英佛も亦之を逐斥して新嘉坡の峽門は之を我國に占據せざるべからざる義に有之、隨つて英佛との爭鬪も不可免とは存じ候へどもこの事は恐らくは之を今日に計畫すべき事に有之まじくと存じ候」と書いて居ります。この手紙は明治二十年のもので、稲垣滿次郎は當時英國に滯在し、貞風とは屢〻手紙の往復をしたのであります。稲垣滿次郎は英國から歸つてから對外策について發表して名聲を擧げ、それ以來、東方策、東方策と綽名されました。

貞風の稲垣滿次郎宛の手紙の書き出しには、「拜啓遠く言を小兒なる貞風に寄せられ云々」とあり、この小兒なる貞風といふのは「當時往復の雜語に有之」と稲垣滿次郎はいつて居りますが、いかに貞風が、氏に兄事したかを察することが出來ます。

貞風は一面學究的な研究的な態度を持つてゐたけれども、經綸を行はんとする志もあり、稲垣滿次郎の福本日南に送つた手紙には、貞風が「東洋策を說く點に於ては中々卓見方策相立ち居候、魯國に對する策も面白く呂宋策尤も妙、此志を以てマニラに遠征せられたるものにて、之を一讀する時は貞風の素志甚だ明かに候まゝ何卒商業史の首にでも末にでも揭載され度く願上候」とあります。貞風が何事をか企てんとしてマニラに赴いたことが明かであります。

帝國領事館がマニラに開かれたのが明治二十一年で、當時は、比島革命の氣運で物情騷然たるものがあつたのであります。

今日比島至るところに、革命の志士として、リサールの像が立つて居ります。三百二十七年の間、スペイン官吏及び僧侶の壓迫の下に苦しんだ比島人が漸く覺醒して來た時、これに炬火を點じたものは、ホセ・リサールでありました。リサールは、スペインの壓政に對して筆を執つて比島人の覺醒を促し、一八九六年十二月三十日ルネタの芝生で銃殺されたのであります。年僅かに三十五歳でありました。

マニラにまゐりました時、ちやうど上陸して三四日してからでありましたが、このリサール

の記念日でありました。私は早大籠球部の一行を率ゐて、花輪をこのリサールの像に捧げたのでありました。貞風がマニラに赴いた明治二十二年、即ち一八八九年は、リサールの活躍の緒を成した時であります。前年一八八八年に、Asociacion Hispana-Filipina. スペイン・フィリッピン協會といふ比島革新の團體が出來、リサールはその最も有力な會員でありました。

リサールは、ラグナ湖畔の彼の住居で、マニラ地方の方言タガロッグ語で小說まで書いて、革新運動に身を捧げたのであります。ラグナ湖はマニラよりずつと南で、ここには溫泉があり、今日、日本人の旅館もあります。また比島國立大學の農學部のあるロスバニオスもこの近くにあります。貞風は、自ら進んで、この嵐の如き呂宋に赴いたのであります。そして、一夜病んで遂に起たなかつたのであります。日本領事館は、その後明治二十六年に閉鎖され、日淸戰爭の後、明治二十九年に再開されたのであります。

「支那との戰爭を好み不申候」といふことが稻垣滿次郎宛の貞風の手紙に見えますが、明治七年の臺灣征討以來、明治十七年朝鮮の變亂はその實日支の衝突であり、十八年天津條約の締結等、この前後から日支間の關係に嵐を呼ぶべき情勢があつたことが分るのであります。

貞風はその著「大日本商業史」の結末に於てやがて太平洋は歐洲大國の勢力の角逐するところとなるべく、北方から、ロシアが南下するであらうし、米國もまたこれに加はることは確かである。どんな事が東亞細亞に起つても、日本と支那とは始終その衝に當らなければならない。日本は軍備の整頓と行政の發達とによつて、東洋の權衡を上下すべき運命にあることといふまでもない。日本は商業を振起せんとするならば、その進路に横はる障碍を切開くべきである、と貞風はいつて居ります。日本と支那とが共同の運命を持つものであることを貞風は信じてゐたのであります。貞風は日支の問題の解決をこの角度より見たものと思はれます。

以上のやうなことが、貞風の「大日本商業史」の卷末の言葉であることから見ても、この著述は單なる商業史ではなく、主張を以て書かれたものであることが分ります。これが貞風の著と並び稱せられる横井時冬の「日本商業史」と異る大　な點であります。

貞風の著述は太古時代に筆を起し、寛永年間で筆を擱いて居ります。主として、外國貿易の歷史に重點をおいて居ります。横井時冬の「日本商業史」は太古より明治三十年頃までの商業、貨幣、度量衡、貸借、鑛業、都市制度、交通等の歷史を組織的に系統を追つて敍述したもので

あります。横井時冬は早稲田大學の前身、早稲田專門學校に學んだ人で、平生の嗜好は歴史史談及び書畫を初め、磁器、陶器、漆器類、茶器、建築、庭園など廣い面に亙つた人で、貞風とはその性質を異にしてゐたことが、二つの著書を比べても分ることであります。尤も横井博士は安政六年の生れ、明治三十九年病歿され、年四十八歳であつたのに比べ、貞風が僅かに二十五歳で歿したため、廣い趣味を持つ餘裕もなかつたことと存じます。

三上參次博士は「横井時冬君小傳」の中に、「去にし明治二十一年の冬なり。文部省の高等商業學校、新たに内國商業史取調係を置き横井君を擧げ、文學士土子金四郎、菅沼貞風の二君と共に、まづ其の事に與らしめたり。然るに幾ならずして土子君は留學の爲めに歐米に出發せられ、菅沼君は南洋諸島に計畫するところありてまた渡航せられしが、不幸にしてマニラに病歿せられぬ。それより後は横井君獨り奮發して事に當り……故菅沼君の遺稿は、紀傳體を用ひ分疏宜しきを得たれども惜しいかな筆を德川氏の鎖港に絶つを以て世人の最も知らんと欲する近世の事に於ては闕如たり。」といつてゐられた通り、菅沼貞風の「大日本商業史」は商業史として我が國の最初のものであるが、德川氏の鎖國で筆を擱いてゐることだけが缺けてゐるといつていい。

この書物から見て、菅沼貞風は、普通の意味の商業史家といふよりは、どちらかといへば、外交史家であり、文明史家でありまして、貞風の最も興味を感じたのは近世の日本の貿易史であつたであらうと思ふのであります。併し一面、貞風は現實の政治に無關心であつたわけではなく、マニラに赴いたのは、三上博士のいふやうに、「南洋諸島に計畫するところあつて渡航した」のであります。

貞風の人となりは、一面非常に磊落であつたことが齋藤坦藏の記したものにより明かであります。貞風から明治二十二年七月四日付齋藤坦藏宛マニラから送つた手紙に、「過般申上置候金子御送被下、正に請取申候、種々面白き談合も出來候故本月中旬には歸國の途に上り可申と存居候。……尚父儀既に上京に有之候はゞ端書にて貞風安全信書參り候と被仰遣被下度候」とありまゝ。この手紙は貞風が死ぬ二日前に書いたものであります。この手紙にもある「面白き談合」といふのが、つまり貞風が何等かの計畫を持つてマニラに渡つたものであることが明かであります。明治十九年軍艦筑波に便乘して南洋を廻つて歸つて來た志賀重昂が、「南洋時事」の名で紀行を書いて明治二十年出版になり、これが非常に讀まれたものです。明治二十三年に經

濟學者であり「南洋經略論」の著者鼎軒田口卯吉が東京府四萬二千の士族に下附された授産金を利用して南洋貿易を興すべしと主張し、南島商會といふのを設立してパラオ、カロリン群島へ船を出したりしたこともこの時であります。私は貞風のマニラに於ける急逝は、日本南進論先驅者の貴い犧牲だと思ふのであります。マニラ郊外サンペドロ・マカチの墓の前に立つて、私は貞風の熱烈な志を追想せずにはゐられなかつたのであります。

貞風の「大日本商業史」は日本の海外發展の國民的意志を書かうとしたものでありました。そして貞風は、自からの死によつて、この「大日本商業史」に書かうとした日本國民の志を確實に南洋の地に根をおろしたのでありました。貞風は富國强兵を說き、膨脹發展を說き、そしてその方法として貿易の伸張を說いたのであります。「貿易を開き、國富を致し、外交を進むる」を以て日本の途と致したのであります。

三、貞風の幼弟その他

さて、貞風のマニラに在り、談偶〻生命保險のことに及び、貞風はひどく自分の死後のことを考へたといふことが傳へられ、しかもその夜病んで亡つたことは、前にも述べましたが、福本日南の序文には次のやうにあります。

君が病で歿するの前夕、三四の同人と一室に會晤す。一人あり、曰く、人生は蟪蛄の如く朝た夕を圖らず、彼の身後の計なき者は死して且つ葬る能はず、吾人須らく生命保險のことを豫考せざるべからずと。君忽ち側より曰く、僕も亦歸朝せば、必ず速に約を生命保險に訂すべしと。其言眞摯切實深く身後を慮るものゝ如し。是に於て余大笑して曰く、男兒事を殊域に圖る、青山曠野豈我の好墓田に非ずや、何爲れぞ其れ局促として身後の計を爲すを用ひんと。君之に應じて曰く、寔に然り、吾儕已に身を以て海外の事業に許す、魚腹青山豈撰ぶ所ならん、唯だ僕に二親の春秋已に高きあり、而して舍弟尙ほ幼なり、僕にして一旦之に先だゝば、誰れか其營爲、苦を助くる者ぞ、僕の生命を保險せんと欲するものは、豫め若干の資財を身後に止めて以て爺孃老後の需に供せんと欲するが爲めのみと。是に於てか、余は深く君が用意の周到なると、孝情の至渥なると、企業決意の斷乎として死も亦顧みざるの志操に感

じたり。既にして各ゝ寢に就く。寢に就きしは、正さに定鐘の音衰れを告ぐるの時なりき。

夜未だ明けず。余尚ほ髣髴として華胥に游べり。人あり、忽然として、余が寢室の戸を槌して曰く、請ふ起きよ、僕夜半より病むこと甚しと。驚起戸を啓けば、君已に戸側に仆る。卽ち急に人を四方に馳せ、醫を延き、藥を侑め、看護頗る勉む。而して夜已に明け、旭日海面を出るの頃は、早や已に此の奇傑の士が瞑目に近きの時なりき。然れども君の精神は、死に際して毫も亂れず、徐ろに環坐の人を顧眄して好意を謝し、尙ほ且つ將來の企望を談ず。既にして最後の期來る。君則ち目を瞪り、余を呼びて曰く、福本君何處に居るか、僕はもう見えんと。此容を視、此語を聞きて余は悲傷胸に充ち飲泣言ふ能はず、因て進て余が手を與へ、永訣の意を表す。此時君が雙眸已に明を失し口亦言ふ能はず。嗚呼英靈忽然として天に去れり。余れ聞く古より高人の死するや神識亂れずと。今ま君が幾多の悲憤と感慨とを齎せる末期の際に於て此嚴正と靜肅とを持して以て後事を談じ、友情を表するを視ば、誰か之を異常の人物に非ずと謂ふものあらんや。

この貞風が「舍弟尙ほ幼なり」といつた令弟は現在佐世保の西海學校の校長である海軍少

將菅沼周次郎氏なのであります。少將は貞風歿した時は十四歳で中學一年生でありました。私は紐育に居りました當時恰もワシントン會議でおいでになつた現海軍主計總監中將武井大助氏を存じ上げて居りましたところ、私が、マニラにまゐつて菅沼貞風の墓に詣でた隨筆を讀んで下すつて御手紙を頂いたのであります。あとで伺ふと、武井中將は菅沼周次郎氏とは佐世保在勤時代歌文の友であられたといふことでありまして、昨年貞風の「大日本商業史」を再び世に出すことに少からぬ激勵を寄せられたのであります。そして、武井中將の御懇情で、私は菅沼少將から、貞風について、貞風の從弟故松野謙一郎氏が貞風逝去の當時、その逸事を自から筆記して、貞風の父量平、卽ち謙一郎氏の父の實弟に與へたるものが殘つてゐるからといつて送つて頂くことが出來たのであります。その文は、幼稚な文でありまして、人物を傳へるつもりで、いつか漢文の調子に興味を感じて作文をしてゐるといふところもありますけれども、貞風の逸事についての貴重な文獻だと存じます。「大日本商業史」の序文、福本日南の文と比べて見ると、日南が用ひたと同じ文句があるのでありまして、日南の文を讀んでから書いたとも思はれる節もありますけれども、日南の文は明治二十五年九月に記されたものであり、從弟松野氏

の文は明治二十二年貞風逝去當時といふのでありますから、日南はこの材料をも見たものと存じます。

其郷に在るに方りてや動もすれば等儕を凌ぎ自ら信ずる所は長者にだも讓らず。（日南）

貞風自居る亦人に下らず、才氣超出、常に等儕を凌ぎ、又長者を憚らず。（松野）

已にして醒めて大に悔恨し、慨然己を責めて曰く、惰夫事に任ずるに足らずと。是れより酒を斷ち一滴も口に上せざること年餘、後ち終に其度を失はずと。（日南）

貞風慨然自ら罵つて曰く、惰夫事を爲すに足らずと。是より一年有餘酒を斷つて一滴も口へ容れず。其自ら持する如此ものあり。（松野）

事苟も其意に拂れば、人の一毫も己に加ふるを肯ぜず。（日南）

年長己に倍するものと雖も、敢て加るなし。（松野）

右に擧げましたものを比べて見ても、この二つの間に、全く關係がないとは考へられないのであり、日南の名文の資料は、この從弟の筆記にあると思ふので、ここにそれを全文引用することに致しました。

故菅沼貞風ノ從弟故松野謙一郎ガ貞風卒去ノ當時ソノ逸事ヲ自ラ筆記シテ貞風ノ父量平即チ謙一郎ノ父ノ實弟（叔父）ニ與ヘタルモノ

菅沼貞風は余が竹馬の友なり。余と彼とは親戚の因あり。互に相睦み互に相爭ひ、喧嘩もしつ、議論もしつ、泣きもしつ、泣せもせし事あり。貞風は慶應元年を以て生れたり。幼名は貞一郎と云ひぬ。彼が狀貌は魁偉ならざりし。彼が腕力は剛强ならざりし。彼は身幹五尺一寸に過ぎず。其體力は彼の所謂兩相如が鷄卵をも碎く能はずと云へるの風ありし。然れども彼は常に氣を以て人に勝てり。氣骨凌然として幼より君群童に秀で、論鋒鋭利常に人に挫かれず。年長己に倍するものと雖も、敢て加るなし。貞風は氣を以て勝ち、氣を以て敗れ、氣を以て生き、氣を以て死するものなり。貞風が一身は氣を以て充たされたり。氣なければ是れ貞風なきなり。故に貞風が事を爲さんと欲する、其是非を見るのみ。其難易を問はず。百艱萬難は彼が顧る所に非ず。貞風幼にして素讀を大曲通介に學ぶ。當時同年にして相競ふもの峯忠四郎（註、忠四郎、謙一郎及び貞風は互に從兄弟なり）あり。然れども遂に及ばず。

已にして玉置環一郎徒を集めて教授す。貞風卽ち就て學ぶ。又書を伊崎一二に學び、劍を荒川某に學ぶ。貞風人と爲り讀書を好み、傳記軍談稗史小說に到る迄また遺す事なし。又書を善くし健筆と稱す。故を以て有文の譽一鄕に嘖々たり。貞風自居る亦人に下らず。才氣超出、常に等儕を凌ぎ、又長者を憚らず。故を以て多く婦人小子の爲めに喜ばれず。貞風武技甚だ熟せず、且力量人に及ばずと雖も、人と爭ひ未だ曾て敗を取し事なし。其赤く閃めく眼に一層の光を添へし時は人をして畏れ且走らしむるに到る。余も亦曾て貞風と爭ひし事あり。貞風激怒石を以て余が指を碎けり。流血淋漓尙ほ瘢痕を存す。貞風常に負けぬ氣を以て人に接すと雖も、事終れば釋然として曾て爭はぬものゝ如し。是れ貞風が人に勝る所以なり。漸く長ずるに及んで、學を楠本端山に受く。當時端山碩學を以て一鄕の尊崇する所となる。貞風が初めて文を作るや、評して曰く斯子文才あり、勉强すれば其才量り難しと。又曾て××論を作る。翁評するに戰國策士の文に似たるを以てして深く喜ばず。貞風爲に屈せず。其說く所自ら儒學者流の輩に倣はざる、知るべきなり。貞風深く酒を好む。曾て親睦會に臨み飲酒過度遂に自ら知らず。道傍に一睡を貪るに到る。貞風慨然自ら罵つて曰く、惰夫事を爲すに足

らずと。是より一年有餘酒を斷つて一滴も口に容れず。其自ら持する如此ものあり。明治十四年松浦伯の三公子平戸に下る。貞風因て命ぜられて、御相手となる。伯が猶興書院を建るや亦入つて學ぶ。旣にして家計困難を極め、專ら學業に從事する能はず。然も尙ほ勵精止まず。自ら云ふ、我能く人の爲す能はざるものを爲さんと。終日營々俗務に鞅掌するの餘暇、或は舊藩主の書庫に因り、或は郡衙の記錄に據り、或は故家の傳記に尋ね、貞風が郡衙を出るに及んで、遂に一部の書を成せり。是れ平戸貿易志なり。明治十七年松浦伯其才を惜み、超でゝ給費生となし、東京に遊學す。先是松浦伯鄕里の諸生東京に遊學するものゝ爲に寄宿舍を建つ。書生因て以て寄宿するもの十餘人、中に浦敬一なるものあり。雄心磊々、氣宇昂然、其有爲の才略を以て常に同鄕の書生の牛耳を取る。博覽勉强稻垣滿次郎の如きものと雖も、人望或は之に如かず。貞風が東京に上るや、常に之と相競ふの風あり。其敬一と接するや、胸臆常に開いて、懷に芥蔕なく、時勢を論ずる每に、氣燄萬丈、互に人と爲りを愛せるものゝ如し。一日松浦伯斗酒を賜ふ。諸生卽ち樽を開き、鄕里の產する所の鰯を燒いて而して飲む。飲む事は長鯨の百川を吸ふが如く、食ふことは大家の芻艸を食ふが如し。且飲み且

食ひ、長歌放吟劍舞拳闘、家爲に倒れんとす。宴闌なり、貞風敬一と共に相論し論鋒愈激し鐵拳次で飛ぶ。貞風大に怒り、傍に有り合ふ火桶を取て敬一に投うつ。中らず、飛んで柱に觸れ、火桶全く碎く、灰飛んで雨の如し。敬一も亦大に怒り、身を以て貞風に當る。兩人躰相適ひ、力相若く、或は上に、或は下に、或は勝ち、或は敗れ、杯盤全く碎け、洋燈も亦覆る。兩人爭尙止まず。人之を止めんと欲すれども、得ず。火を點ずれば、拳忽ち飛び、洋燈碎くるもの五つ、瑠璃片散亂するもの其數を知らず。貞風敬一、其上に於て格闘愈盛なり。諸生盡く出去る。暫時にして歸來れば爭闘已に果てしと見え、兩人談笑舊の如し。相顧て共に笑つて曰く、汝が面何ぞ傷痍の多きや。夜明け兩人衣を脫すれば、全身亦傷ならざるなし。それより貞風島田重禮の塾に入り、又古典講修科第二部に入り、漢學を修め、又秋月氏（註、秋月章軒翁）の塾に入り、其後又寄宿舍に歸れり。折しも九月の半頃滿天晴靈して更に一點の雲をも見ざりしかば、爭でこの良宵を過すべきとて、同朋十餘人二隻の舟を借りて月を二州橋畔に賞す。到れば微風漾々炎塵到らず、天色油の如く、水色鏡の如く、月は中天の間に懸り、金龍時に動き、櫓聲相答ふ。一行携ふる所の杯を擧げ、詩を賦し、歌を吟じ、自ら風

塵の中を脫するが如く、且笑ひ且酌む。酒將に央ならんとす、貞風激昂時事を談ず。諸友相和し雷聲電擊、舟中亦修羅の場とならんとす。中に一人あり、自ら衣を脫して水中に入る。諸友相次ぎ、水中亦一個の小闘を見る。競泳轉じて一舟に集まり、又牛飲馬食、醉愈發し、快愈極まる。酒盡く。相共に舟中に枕籍して夜の深きを知らず。暫時ありて醉漸醒む。顧れば四邊の風色寂寥として亦兩國の邊に非ず。貞風裸體獨櫓を取つて水流に溯る。余笑つて曰く、兄何をか爲す。貞風聲を潜めて曰く、勿れ吾將に舟を漕いて上流に溯り、拂曉千手（註、千住）の大橋に到り、諸友をして一驚を喫せしめん。余笑つて曰く、諾。舟中峯貞五郎あり。俄に蹴起貞風を罵つて曰く、黠奴、又惡戲をなすか。貞風曰く、我焉ぞ惡戲を爲すものならむや、舟將に兩國に近づかんとす。蓋し此時已に吾妻橋に近かんとするなり。貞五郎聽かず。曰く、是兩國に非るなりと。相爭うて腕力に訴ふ。貞風勝たず。自ら水中に投ず。貞五郎曰く、馬鹿。亦舟中に横ふ。此時余も亦睡魔頻に催す。暫時あつて眼を開けば、舟は御厩橋に到る。而して貞風は在らず。峯に問うて曰く、貞風は如何。峯曰知らずと。忽ち岸上車聲轔轔として起る。車上大に呼んで曰く、馬鹿。兩人其貞風なるを知る。亦大に呼んで曰く、馬

鹿。舟を漕いで舟店に歸れば貞風已に在り、相伴うて而して歸る。蓋し貞風が水中に投ずるや、自ら以爲く、我水を切つて上流に向はゞ諸友必ず追到らん、舟愈來らば吾愈進まん、是千手に到るの道なりと。峯も亦以爲く貞風自ら水に投ずと雖も氣力限りあり、氣盡きなば、自ら歸來るの時あるべしと。而して時將に干潮に屬し、水流矢の如く、貞風愈上つて而して舟愈下る。貞風力漸く疲れ、顧れは舟は全く其影を留めず。貞風曰く、失敗せりと。漸く泳て荷揚場に到り、息を一吹、顧みるに人力車もなし、貞風裸體寛ゝとして歩む。已にして人力車に遇ふ。曰く、參りませう。淺草橋迄幾許にて行く。十五錢下さい。蓋車夫其裸體なるに附込み格外の賃錢を貪らんとするなり。貞風曰く、馬鹿。尙ほ悠ゝとして歩む。車夫爲に呆然たり。暫時にして又車夫に遇ひ相當の賃錢を拂うて歸れりと云ふ。貞風の氣宇概ね如此。

同じく平戸出身の岡次郎先生は最近まで、早稲田大學に教授せられてゐましたが、老齢の故に退かれ、今は雲烟閑霞を友とせられてゐますが、岡先生は貞風の弟周次郎氏が菅沼貞風の遺

髪を平戸先塋の側に葬むるに當り(大正三年)、碑文を書いてゐられます。その中に「爲人倜儻不羈、夙抱大志、讀書不治章句、其論事、援證東西、商榷古今、據理而斷、皆可見之行事、然年少氣鋭、一有所決、如駿馬脫勒、不可掣止、其中塗挫折、可不爲大哀乎」とあります。貞風の人と爲りを想像せしむるに充分であります。

福本日南は、「余れ熟ら當今の士人を觀るに所謂大志ある者は、多くは放漫にして恒業を勤めず、所謂勤業の人、概ね齷齪として大志あらず、二つの者を兼ねる、余れ君に於てか之を視る」と書いて居りますが、「細心は君が先天の素性にあらずして寧ろ後天の工夫に成りしを見る可きものあり」といつて、貞風の年少不屈の人であつたことを述べて居りますが、その事は、從弟松野の筆記で明かであります。尤も、當時はかういふ行動が、青年の間に風を爲してゐたのであります。星亭の傳記を見ても、明治二十年代の政治小說を見ても、かうした逸事を快として ゐたのであります。二十三歲の青年にして、あの大著「大日本商業史」を書くにあたつて、細心のところがなければ出來ることではないのでありまして、貞風後年の工夫、まさに一個の人物を作り上げたのであります。

菅沼少將より、詳細な系圖の一覽を許されました。それに依れば、菅沼家の先祖はもと清和源氏の出で、土岐新三郎家直、初め三河國額田郡菅沼に居り、菅沼美濃守と稱し、その六代目定如となり、今川義元に屬し、七代目菅沼傳左衞門に至り、德川氏に依り、四代の後、勇助、平戸に下り、更に寶曆七年江戸詰となり、安永七年卒、下谷永昌寺に葬る。その子彦儀用人となり、中老となり、御隱居樣御附殿役となる。文化九年歿、下谷永昌寺に葬る。江戸留守居中捕鯨に付き、高田屋嘉兵衞の交渉に應じたることあり。その子義一子なく、多門その家を繼ぐといふことになつて居ります。多門以下の系圖を左に簡單に記して見ます。

菅沼家系圖の一部

- 多門（靜山侯第二十八子、文政六年四月十三日江戸に生る、峯村多門と稱す、天保四年菅沼義一の名跡を受くべしとの命を得てその家を繼ぎ中老嫡子格となり二百石を賜ふ）
  - 愛哉
  - 丑之助（萬延元年十一月晦日平戸勝手命ぜらる、同二年二月十七日江戸を發し、同三月二十六日平戸着、量平と稱し、義任と名づく）
    - 量平（義任子なし、家老松野太郎右衞門の孫にして壹岐勝本の城代たりし松野新左衞門の子なり、文久二年量平跡式を受け祿石二百石を食む）
      - 貞風　母佐々氏　明治二十二年七月六日歿、年二十五
      - 從　母佐々氏村尾喜作に嫁す　昭和十三年四月二十日歿、年七十二
      - 周次郎　母貞方氏、妻村崎氏名千代
        - 義方
        - 義重
        - 義路
        - 義質
        - 義遠
      - 藤　母貞方氏、捕本正儀に嫁す

貞風の「大日本商業史」

一、總　論

「日本には商業の歴史なし。其之を研究して稍や連絡を得せしむるものは恐らくは、余が此大日本商業史を始とするならん。勢既に此の如くなれば、其完全なる結果を得んことを望むは殆んど得べきにあらざること、諸君もまた之を諒す可し。」

抑も商業といふものは、農工各種の業とは異り、自から物品を生産するものではなく、人の生産したもの、交換の媒をして助け、賣らうとするものに容易に最も高い市場に賣ることの出來るやうにし、買はうとするものに容易に最も低い市場で買ふやうにさせ、生産の效果を增加し、自からは、交換價格の差を受取つて利益するのが商業であります。もし生産者が、自分でかういふ風に賣ることの出來る市場をさがしたり、消費者がかういふ生産者を求めるといふこ

とであれば、その勞費が大變で、生産の效果があがらないのであります。然るに、ここに交換の媒助に專任するものがあつて、兩方の間に立つて周旋し、各地の品物の需要に常に注意し、最も供給の多いところの品物を運搬して、他の最も需要の多いところに分配する時は、生産者が自から賣り、消費者が自から買ふよりも遙に多い利益を彼等に與へても、なほ餘剩を得る途を發見することは、敢て難しいことではないのでありまして、「この勞役に從事してこの餘剩を收得するものは卽ち商業」なのであります。

分業と交通

そして商業といふものは、分業があり、交通がなければ發達するものではありません。上古、交通開けず、人が禽獸と一緒にゐた時分には、草根木實を食べて居ればそれですんでゐた時代で、商業の起る必要がないのであります。だんだん人類の智惠が發達し欲望が增して來ると、こんな生活では滿足することが出來なくなるのであります。山を穿ち、澤には舟を渡す時代となると、もう漁獵の社會は漸く進んで、牧畜耕耘の時代となります。さうなると、財産の所有

を生じ、分業が起り、交通頻繁となり、物品の交換が行はれて、商業の必要が起るのであります。始めは、一部落一種族に過ぎないものが、交通も分業も區域を擴張し商業も擴張して一國の組織を持つやうになり、內國貿易のみならず、外國貿易といふものも生ずるに至つたのであります。

外國貿易には二種類あります。一は働掛けの貿易といひ、一は受身の貿易といふのであります。今日の我が國の貿易は、全く受身の貿易で、坐して彼の來り買ふのを待つ有樣で、そこで、我が國から買ふものはいつも高く、賣るものはいつも低いのであります。彼が賣らんとするものを賣られ、彼が買はんとするものを買はれてゐるのでありまして、全く受身なのであります。「世人多く言ふ、日本は東洋商業の中心たるに適當なり。人口多く、物産饒に、數多の良港其周回を繞て、海運の便極めて富み、東に北米の合衆國あり、南は濠洲の植民地あり、西に支那あり、此に魯領浦鹽斯德、ニコライスク等の地方あり、我國この中心に居て、頗る天然の形勝を占む」といつて居ります。其語壯にして其意美し、然しこの希望を達せんとせば、「斷然働掛けの貿易に從事し、我買はんと欲するものは自から産地に就きて之を買ひ、我賣らんと欲

する所のものは自から販路を求めて之を賣り、且つ之を運搬するにも、亦自國の商船を用ひ、更に一歩を進めては、四隣諸國の間に周旋して其物品の交換を媒助し、低買高賣の間に仲買の利益を專占して、富源を版圖の外に開通するの勇氣を要す」るのであります。鎖國の餘習にいつまでも囚はれて、坐して受身であるごときは、與に語るに足らないのであります。我が國は鎖國の夢を見た、併し國を鎖し退歩するは、日本國民の本領ではありません。私が、商業の歴史を書く所以は、その事を證據立てようとするためであります。

四つの時代

我が國の商業史を太古の時代、上古の時代、中古の時代、近古の時代の四つに分けました。

日本民族の勢力が、朝鮮、支那に飛び、銅または銀を以て貨幣とするに至り、交通貿易が起り、支那の文物が輸入され、他の古來の族制政治を一變し、中央集權の政府を建つる端緒が開けたのであります。これが太古の時代であります。

推古天皇の御代に使を隋に遣したのは、我が國外交の一大發展でありまして、久しく遣唐

使がつづけられましたが、これが廢止となり、後宋に往〻往來したものは配流の刑に處せられるやうになり、商業は受身の貿易となりましたが、我が國民の活潑なる、自から範圍の外に逸出したものも生じ、元寇の役の後、商業の氣運大いに起つたのであります。これが上古の時代、即ち遣唐使並にその廢止後の時代であります。

元寇の役後、商船の元に行くもの多く、また八幡船の活躍となり、歐洲諸國は航路を東洋に開くといふ時代で、これが中古の時代、即ち海賊の時代であります。

歐洲貿易が盛んになり、東西の二洋が相交通し相貿易するに至り、我が國にはカソリック教傳り、九州の諸領主これに歸依し、「長崎港を占領して寺領とするに至りしかば、漸く我國人に嫌惡され、太閤の海内を統一するや遂に我が國より放逐」されることになり、德川時代には、メキシコのアカプルコ港との間に日本商船の航路を開き、朱印船の時代となり、日本商船は「天笠渡海船賃六百匁にて毎往還三百餘人の乘客を搭載」したといふのでありましたが、遂に鎖國令により、かくの如く進歩した造船術も失はれたのであります。これが近古の時代、歐洲貿易の時代であります。これより後は、全く鎖國の時代であります。「桃花源上に肥遯して春風に長

睡せし時代」であります。併し今日の我が國の內國商業は、源をこの際に發す。故に、この際に發達して來た各種商業について研究することも必要ではありますけれども、私はまだこれを研究する時間がないのであります。ただ、我が國民の本領が、決して國を鎖して、疆域の中に退守するものにあらざることは、既に述べたごとく、明驗確證歷々として見ることが出來るのであります。

二、太古の時代

抑も商業は人類社會の發達と共に生れ出づるものであるから、その起源を詳かにしようとするならば社會發達の跡をたづねなければならないのであります。そして人間が幼少の時代のことを悉く覺えてゐないやうに、社會もその發達の歷史を悉く記憶するものではありません。まだ開けない時代のこととなると、これが傳說の形で傳つてゐるのであります。傳說では誤りがあるとしても、單純な思想にうつつて殘つて來たのでありますから、そこには却つて眞實なこ

とが語られてゐることが多いのであります。

古代に於てどんなに農業を盛んにしたところで到底人口の增加に伴ふことが出來なかつたためだんだん日本民族が四方にひろがつて行かなければならないことになりまして、或は蝦夷にも行き、朝鮮にも渡つたのであらうと考へられるのであります。滿洲へも日本人が入つて行つたにちがひないことも、言語學的方面から想像されるのであります。

支那民族との衝突

かうして、日本民族が朝鮮半島から更に西の方に向はうとしてゐた時に、東の方へ移動を初めた支那民族とぶつかることになつたのであります。

神功皇后の新羅征伐といふものは、當時熊襲の叛亂に困つてゐた我が國は、新羅を征服するならば、熊襲もまた服するに違ひない。何故ならば、だんだん支那人種が朝鮮に入つて來たので、日本から出かけて行つたものたちで仕事を失つたものたちが澤山九州に歸つて來て、そのものたちが朝鮮と連絡して九州の南部を騷がしたのであるからであります。

次第に日本と朝鮮、支那との交通も起り貿易も起つたことでありますが、國内も國外も凡てが簡單な交換でありました。

簡單な交換

當時の商業といふものは、甲が今日勞力によつて得たものを乙に分ち與へ、乙はその報酬として乙が得たものを甲に分ち與へるといふごときものか、または、甲が山の幸あれば、鳥や獸物を捕へ、乙は海の幸あれば、魚などを捕へ、その嗜好によつて各々互に交換するといふやうな簡單な交換であつたのであります。交換は互に滿足するものであるから、上古に商賣のことをアキといつたもので、アキは飽きない程滿足するといふ、飽滿といふことである。商賣をすることを商ふといひ、商賣をする人をアキビトといつたものであります。我が國が外國と商賣するに當つては舟が入用でありますが、大阪の難波から樟で作つた古い船が掘出されたことがあります。かういふ船に乘つて日本民族は海外と往復致したのであります。

我が國古代の人民の多くは何を以てその業としてゐたかといふに、或は工業、或は商業もあ

つたけれども、概してこれをいふときは、全く農なりといふも決して過言ではないのであります。しかしてその農業の中では米を作ることが最も盛んでありまして、當時の農民は全然米作に從事してゐたといつてもよかつたのであります。

凡そ西洋であらうと東洋であらうと何處の國でも、その古代の事實を知らうと欲するときは、當時の文獻が殘つてゐるといふ譯ではありませんので、言語に依るにあらざれば、他にこれを研究する方法がないことも多いのであります。いま行はれてゐる言語の中から古代の社會を考へ出すといふのが、一番いい方法の一つであらうと考へて居ります。

イネとネウチ

そこで、我が國でお米の稻のことをイネといふのでありますが、濱田健次郎氏の說によれば、イネのイは接頭語でネが本當の言葉である。今日でも價のことを、ネウチといつてゐるのは、古代に於ては、イネを以て、米で物の賣買の時の交換の通貨としたことが明かだと思はれるのであります。そして古代の貨幣の中に「稻文赤銅錢」といふものがありますが、その錢に七と

いふやうな文様（七）、これは卽ち禾、卽ち稻を示したものであります。天武天皇の御代に作つたものだといふ說もあります。天武天皇の御代といへば和銅開珍の出來た時より三十年も前であります。この米の文様を錢に用ひたことは、太古に於て米を以て通貨としてゐたことを證明するものだと思ふのであります。

三、上古の時代

日本人は昔から進取的の民族であつて、常に改革が行はれる。我が國に佛敎が入つて來てから、日本人が漢字漢文を解するやうになつて、改革の範を支那に取るといふことになりました。

佛敎が我が國に入つて來ると、政治上の關係からして大に傳播の勢を逞うし「漢字を讀むといふ風も一般に行はれることになつたのであります。そして漢文を讀み、漢文を解することが世に行はれるやうになると、遂に彼國の政體を知り、彼の國の學說を研めしものを生じ、「彼の

普天之下莫非王土、率土之濱莫非王臣と云ひ天無二日民無二王と云へる學說」が、「廣く我が國に特有なる尊皇理想を浹洽」することになり、國民の間に內政改革の希望を生ずるに至りました。佛敎が入つて來た時に、蘇我氏、物部氏の二氏の爭が甚しかつたが、蘇我氏は佛敎を敬ひ、物部氏は反對したのでありましたが、物部氏は滅んで、政治は全く蘇我氏に歸したのであります。そこで「佛敎は恰も、苗の雨を得たるが如く勃然として起り、」推古天皇の御代には、寺四十六所、僧八百十六人、尼五百六十九人、合計千三百八十五人あつたといふのでありますから、如何に佛敎が盛んであつたかが分るのであります。

聖德太子

當時、皇太子にして萬機の政を攝したまへる厩戸皇子、卽ち聖德太子は最も聰明であらせられ、隨つて新思想を理解せらるることも亦早かつたのであります。太子は推古天皇の十二年（西曆六〇四年）四月憲法十七條を作られたのであります。その中に、從來國司、國造などの地方官が土地、人民を私有して來たやうな見解を打破されまして、「國無二君、民無兩主」といふこ

とが掲げられて居ります。かうして大政の方針が定ると、國の改革を行ふために、遣唐使を支那に送つて、支那の文物を學んで來ることが必要となつたのであります。我が國の積弊に堪へざるところの族制政治から、支那の郡縣政治を模倣するに至つたが、政治改革には善惡の別なく舊物を厭ふ風を生ずるもので、服裝に至るまで、唐制を眞似るといふことになりました。

そして、遣唐使の數は一艘に百二十人も乘つて二艘で出かけたこともあり、四艘で行つたこともある。使藤原清河の乘つた船は、海上にただよつて安南の方まで流され、清河は長安に行き唐に留まつて了つたので、朝廷では、高元度を迎入唐大使使として、送られたが、その時は清河は既に唐の役人となつてゐて歸朝の氣持がない。漸く支那の方で、長さ八丈の船を作つて、水手數十人を乘せて、清河を送り歸らせたといふこともある。かうして遣唐使が幾度か支那に赴いたが、その弊害もいよいよ加はつたのであります。

既に腐敗した支那文物の空氣を吸收して、國家は漸く肺病に罹り朝鮮半島の屬地まで彼國に奪はれても、これを恢復する術がなく、その極つひに內自から困憊して日本から使者を送るのに國庫の收入の如何を論ずるほどに至つたのであります。

文武天皇の御代に赴いた我が國の使に對し、「今看二使人一儀容太淨」といはれて喜んだり、仁明天皇の御代には、遣唐使裝束司といふものまで設けられるほどで、如何に日本が支那文明に感化されたかが分るのであります。

支那との貿易

遣唐使は仁明天皇の御代第十四回(花園註)の差遣までつづいたが、宇多天皇の御代、菅原道眞を大使に任ぜられたが、唐が衰亂してゐるとの理由で廢止されるに至りました。元來日本と支那との間の貿易も地方の縣主などが、祕かにやつてゐたものであるが、中央政府に政權が統一されることになると、地方の豪族が次第にその勢力を失ひ、到底個々たる商人が海外へ向け商船を仕立てることなどは思ひもよらず、そこで國際の需要はただ一つ遣唐使の赴くに當つて行はれてゐたのである。然し支那と我が國とのやうに、大地の相去る甚だしく、その物產も自から莫大の差異があるといふ風に、互に物產を交換することは雙方の利益であつたものですから、遣唐使も廢止されて我が國から彼地に赴くことも稀になると、隨つて彼地から我が國に商船が

送られるやうになりまして、仁明天皇の御代、西暦九世紀の半ば頃から屢々唐の商人が日本に來着するやうになつたのであります。續日本後記に嘉祥二年（即ち西暦八四九年）唐の商人五十三人を乘せ、多くの貨物を積んだ船一隻が來着したとあります。三代實錄に貞觀七年（西暦八六五年）に唐商人李延孝等六十三人の商船一艘、貞觀八年張言等四十一人の商船一艘が來着。同じく三代實錄に貞觀十六年に唐の商人崔岌等三十六人の商船一隻着、貞觀十八年唐商人楊清人等三十一人一隻に駕して着、といふやうに我が國にはどしどし唐の商人が來たのであります。そして、我が國の對支貿易は全く受身の貿易となつたのであります。この頃年毎に唐の商人が我が國に來たので、その度毎に朝廷から使を遣して持つて來た貨物を檢べさせたのであります。朝廷が外國貿易に非常に關心を持つてゐられたのであります。一人の唐商が孔雀を獻上したので御前に召して交易唐物を叡覽あらせられたことなどもあるのであります。

唐亡ぶ

西暦九〇七年に唐が亡びてから支那は大いに亂れ、南方に吳越が起り、吳越の人々は我が國

にも隨分來ましたが、西暦九六〇年に宋が興り、我が國はまた宋と交通するやうになつたのであります。初め宋は國内が統一せず、我が國との交通もなかつたのですが、圓融天皇の御代に宋は吳越を滅してから始めて我が國と商業上の交通を開いたのであります。圓融天皇の天元五年（西暦九八二年）八月に、僧奝然（ちうねん）が宋に赴いて日本天台山延暦寺に送つた手紙の中に、適遇商客、歸る時一緒に日本に歸ることをすすめられたといふことがあります。即ち一條天皇の寛和二年（西暦九八六年）七月宋の商人が來たので、また日本に戻る時、奝然をつれて歸つて來るやうにと頼んでやつたので、同じ御代の永延元年（西暦九八七年）奝然はその船に乘つて歸つて來た。奝然が歸るとすぐ、その弟子の嘉因を遣して宋に赴かしめたのですが、これは皆商船の往來に依るものであります。

支那への輸出品

この時、奝然が弟子の嘉因に支那に進物として持たしてやつた品物は次の如きものであります。

佛　經　（青木の函に納めたもの）
念　珠　（琥珀、青、紅、白の水晶、これは一連宛、螺鈿の花形の平函に入れたもの）
毛　籠　（螺杯二つを入れる）
葛　籠　（法螺二つ、染皮二十枚を入れたもの）
金銀蒔繪筥　（この中に重要文書を入れて行つたもの）
金銀蒔繪硯筥　（金銀鹿毛筆、松煙墨、金銅水瓶、鐵刀）
金銀蒔繪扇箱　（檜扇二十枚、蝙蝠扇二枚）
螺鈿の机　（白細布五匹を入れる）
倭繪屏風一雙
石硫黄　七百斤

これは齋然の弟子の嘉因が持つて行つた進物でありますが、これにより當時、支那に輸出してゐた品物の一斑を知ることが出來るのであります。嘉因は三年目に日本に歸つて來ましたが、その後、宋の商客の往來は常に絶えなかつたのであります。我が國でさういふ支那からの

客人を迎接する費用がかさむので宋の商人に來朝する年を一定したのであるが、期限前に來たり、また、來たものが數年も滯在したりしたものもあり、四月に來たものが七月には漂流して來て、貿易したものもあるといふ風で、百錬抄に宋客來往のことが一々記されてゐます。百錬抄は、我が國の年代記で十七卷あるが、現存のものは初めの三卷を缺き、冷泉天皇の御代から後深草天皇の御代に及んでゐます。內容は正確で信憑すべきものであります。（百錬抄につき花園註）我が國からも、私に宋に渡つた商人もあつたが、發覺して佐渡國に流されたりしたので、僧侶の外は往くものがない有樣となりました。

百錬抄に延久五年白河天皇の御代、西暦一〇七三年十月「入唐僧成尋歸朝、太宋皇帝被獻金泥法華經一切經錦二十段」とあります。我が國からはその答禮として白河天皇の承暦元年（西暦一〇七七年）に六丈の織絹二百匹、水銀五千兩を贈つて居ります。この使をしたのが通事僧仲回でありました。かういふ風で我が國と支那との交通が極めて頻繁で、人々は交通の困難なことを最早考へるものもなくなつたのであります。

順德天皇の御代、建保四年（西暦一二一六年）六月鎌倉三代將軍源實朝が自ら宋に赴かんと

したことはその證據であります。

朝鮮との交通

一方我が國と朝鮮との交通も頻繁でありました。白河天皇の御代卽ち西曆一一〇〇年代に高麗から我が國に良き醫者を求めたりして居ります。當時日本商業の中心はいふまでもなく京都でありまして、東海、東山、山陰の三道のものは陸運により京都に集り、北陸のものは敦賀より大津に出て京都に達したのであります。また山陽、南海、西海の三道のものは海運によつて大坂に集り、そして京都に運ばれるといふ風で、京都は實に海陸運輸の中心となり、國內商業の氣運を增進したのであります。そして九州に於ては博多がその中心となり博多は政治上、商業上、最も重要な地となつたのであります。

朝鮮及び支那との交通路

我が國から朝鮮や支那に渡るにはどういふコースを取つたかと申しますと、天平五年（西曆

七三三年）入唐使に賜る歌が萬葉集にありますが、これを以てその時代から鎌倉時代以後まで、京都から太宰府に達した有樣を想像することが出來るのであります。

ソラミツ、ヤマトノクニ、アヲニヨシ、ナラノミヤユ、オシテルナニハニクダリ、スミノエノ、ミツニフネノリ、ナナワタリ、ヒノイルクニニ、ツカハサル、ワガセノキミヲ、カケマクノ、ユユシカシコキ、スミノエノ、ワガオホミカミ、ウネノヘニ、ウシハキイマシ、フナトモニ、ミタタシイマシテ、サシヨラム、イソノサキサキ、コギハテム、トマリトマリニ、アラキカゼ、ナミニアワセズ、タイラケク、イテカヘリマセ、モトノクニヘニ、

既に太宰府に至るや朝鮮に赴くものと、支那に赴くものとに論なく、共に今の九州佐賀の唐津灣である松浦潟に至り、ここから朝鮮に行くものは壹岐、對島のコースを取り、支那に赴くものは庇良（ひら）、値嘉（ちか）、卽ち後の平戸、五島のコースを取つたのであります。唐人その他が常にこの間を交通してゐたことが、高岳親王の「入唐略記」などから窺はれるのであります。

高岳親王は平城天皇の第三皇子で、平城天皇が嵯峨天皇に御位を讓らせられると、皇太子とおなりになりましたが後出家して名を眞如と改め東大寺に住し、密敎を空海に受けた方であり

ます。法を求めて唐商等六十人を率ゐて太宰府を發し唐の明州に達した。唐に留ること二十年、更に印度に渡り法を求めんとして羅越國に到つて薨じた。御年八十歳以上でありました。(以上花園註)

唐に入るには今の寧波(ニンポー)、當時の明州を經たことは安部仲麿の「あまの原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」の歌が明州で作つたものであつたのに照しても明かであります。

商業の中心地

當時商業の三つの中心地は、京都、難波、博多であり、朝廷はこの三ケ所に鴻臚館といふものを置いて、唐の商人、朝鮮の商人等をここに泊めて待遇し、彼等をして貿易を自由にすることを得させなかつたのであります。そして我が國商人が商賣をすることになると官吏が立合つて貨物の交易をしたのであります。

貨幣

貨幣のことに就いて、いつ頃から我が國で貨幣が用ひられたかといふと、鐵が輸入されてからのことで稲文銅錢などもありましたが、その後、和銅元年(西暦七〇八年)和銅開珍が出來た時を以て歴史上最初と致して居ります。和銅錢の始は近江の國で鑄られ、また太宰府や播摩などでも鑄られたやうであります。朝廷はその發行するところの貨幣を流通せしめようとして、和銅四年十月の詔に蓄錢者に位を授くる旨が宣布されて居ります。また諸國より朝廷に物を納めるにも、錢を以てせしめたりしたのであります。また路傍に米賣場を置いて、旅人をして食糧を携帶するの勞を省かしめ、錢を用ひるの便利なことを知らしむる詔が出ました。然し乍ら新しい錢の鑄造があまりに屢々でありましたので、貨幣が流通することなく、多くは發行者の手に戻つて了つたのであります。毎回、新しい錢はその一を以て舊錢の十に當らしめたのであります。貨幣の法定價格はその原價より幾層倍であつたのであります。ところが政府の貨幣鑄造の技術が幼稚であつたため、官錢は均一でなく、私錢にも劣つたりしたのみならず、新舊共

に行はれたりして、物價の標準が立たなくなつたのであります。百錬抄には一條天皇の永延元年には「上下人々不用錢貨事」とあります。

鎌倉時代

鎌倉時代となり、源頼朝が我が國の政權を一手に收めて、天下の大小名に對して鎌倉から號令をかけるやうになり、商業の中心も鎌倉に移るべきであつたが、鎌倉の政は節約主義で消費を制してゐたことと、鎌倉の地が狹くて運輸が不便であつたため、鎌倉は僅かに關東貿易の中心となつたに過ぎなかつたのであります。そして政府の消極的な方針のため積極的な商業家は朝鮮、支那の沿岸に進出することとなり、支那の貨幣を輸入して內地に流通せしめるに至つたのであります。後深草天皇の御代、寶治元年（西暦一二四七年）十一月、西國米穀渡唐停止之事といふ命令が出てゐるところを見ると、北條氏の時代に商業の氣運が漸く恢復して、米穀が盛んに輸出され、そのため米價の騰貴となつたことと思はれるのであります。當時、唐に渡る船の數も極めて多く、我が國の必需品まで輸出して米價を騰貴せしめ、或は海外の贅澤品を輸入

して市場に充滿させたので、北條氏の儉約政策に一大打擊となつたのであります。弘安の役で元寇を却けてからは、我が國の商人で彼地に赴くもの益ゝ多く、また停止すべからざる勢となつたのであります。

四、中古の時代

弘安二年（西暦一二七九年）に支那では元が宋を滅し、翌三年六月に元は我が國に使を送つて、その前からごたごたしてゐた日本との國交の調整を求めたが、幕府はこの使者を博多で斬らしめたのであります。ここに於て元は弘安四年七月に元軍十五萬を以て來寇して來たのであります。併したまたま大暴風が起つたためと、我が國人の勇武のために元兵は散々に打破られたのであります。そこで我が國の商人は元の國力を測定して與し易しと知り、弘安四年の役の後、まだ十年を經ざるに、彼國に渡つて貿易するものが出るやうになつたのであります。併し元の方では我が國の方から復讐的に攻擊されることを恐れ、我が國商人の貿易を禁じ、我が

國商人の上陸を禁じたのであります。

我が國の商人はそれでも彼國に往つて貿易し、或は爭の結果、彼地の城郭を燒拂つたこともあつたのであります。

元亡び明興る

後村上天皇の御代、西曆一三六八年に元は亡び明が興りました。これより前、我が國では北條氏が亡びて足利氏の時代となり、我が國の商人が明と貿易するものが頗る多く、その貿易によつて、明の永樂錢が輸入され、內地に通用したのであります。併し我が國と明との貿易に對し明の政策が、我が國から輸入の量を制限し、我が國商人の不平を起させるばかりでありました。足利義政の時には明から受取るべき貨物の値は、二十一萬七千錢と定められましてゐたのに、遽かに三萬四千七百に減じたので、我が國の使者等は不平の極、强暴に傾き、彼國の海邊を橫行したので、使者をして各樣刀劍總不過三千把と定めたのであります。かういふ風で、次第に貿易の道が塞がれたので、八幡船（バハンセン）の活躍となり、倭寇の時代となつた。

八幡船といふのは我が國の西邊の民が黨を組んで支那、朝鮮の沿岸に渡航し、或は貿易を營み、或時は沿海を侵掠し、彼國の海賊もこれに加つて勢甚だ盛んであつたが、彼國ではこれを倭寇といひ、その船を八幡船といつて甚だ恐れたのであります。當時朝鮮と我が國との間に每年の渡航、凡そ百二十七艘の船で朝鮮に我が國との通商の港三ケ所あり、熊川の乃而浦、東萊の富山浦、蔚山の鹽浦で、ここにある日本人は總計戶數四百四十六、人口千六百五十であつたといふわけで、如何に朝鮮との貿易が盛んであつたかが分るのであります。

八幡船

八幡船は冒險的な密商が八幡宮の幟を立て、朝鮮や支那の沿岸のみならず、呂宋、安南、暹羅、滿剌加まで襲つたのであります。この現象は十五世紀の末、歐洲の戰爭が稍止んで漸く暗黑時代を經過しようとするや、海賊が大いに起つて航路を前代未到の地に開き、各處に植民し航海の術も大いに進步したのと同じ現象で、コロンブスが米大陸を發見したのも、同じ氣運に誘はれたためであつたのであります。併し我が國戰國の終局は、少しく歐洲の暗黑時代より遲

かつたことで、そのため日本人をして米大陸を發見するの機會を失はしめたのであります。

室町時代の商品

室町時代に於ては如何なる商品が著名であつたかといふと、畿内近國では六條の染物、宇治の布、烏丸の烏帽子、奈良の刀、高野の剃刀、その他扇、針、筵等があり、諸國では加賀の絹、尾張の八丈、信濃の布、常陸の紬、上野の綿、武藏の鎧、佐渡の沓、伊豫の簾、備前の刀、出雲の鍬、甲斐の馬、長門の牛、奥州の金、備中の鐵、越後の鹽引の魚、隱岐の鮑、周防の鯖、土佐の材木、能登の釜、河内の鍋、備後の酒、和泉の酢、筑紫の穀物、或はいろいろな異國の唐物、高麗の珍物等であつたといふことが「庭訓往來」に出て居ります。異國の唐物、高麗の珍物といふ中には絲、眞綿、布、水銀、針、鐵鍋、磁器、古錢、古畫、古書、藥、氈毯、漆器等で、我が國の方から輸出したものの中には鎧、劍、鎗、腰刀、琥珀、硫黄、牛皮、金屏風、水晶の珠數などがあつたのであります。

當時我が國では宋の錢が行はれてゐたので、後醍醐天皇の御代、建武元年(西暦一三三四年)三

月建武の中興の業を起し給へると共に、貨幣改鑄の詔あり、且つ初めて紙幣(楮幣)を用ひらるることになつたのであります。併し二年の後延元元年(一三三六年)尊氏入京するといふやうな紛爭の時代で、これ等新造の銅楮兩貨も、世に行はるるに至らずして、使ひ慣れた支那の錢のみが行はれたのであります。

商業中心堺に移る

當時我が國の商業は漸く京都を去つて、堺に移るやうになつた。堺は京都を距る十六里、港には大きな船が入るのに便であつたため、國内國外の商業はこの地を中心として行はれるやうになつたのであります。後小松天皇の應永の御代、即ち西暦十四世紀の末に、大内義弘が堺の地を領し、港を開いて朝鮮、支那、印度等の亞細亞諸國と交通し互に商船を往來せしめたので、遂に一都會を成すに至つたのであります。佛人ジヤンクラセの日本西教史に「堺は泉州の一都會にして京都を隔つること十六里日本の中にては最も殷富にして有名の地なり亞細亞諸國と通商し商家殷富にして貨物輻湊せり」とあります。

「堺鑑」といふ本に、當時の人が「堺の腹はれ町人」といつて罵つたといふことが書いてありますが、當時、堺が殷富にしてその市民が腹便々として食ひぶくれた者が多かつたのをいつたものと思はれます。

當時外國貿易の船は我が國にゐる支那の人が資本を卸し、我が國の精巧なる大工に作らして自からその船主となることが多く、我が國の商人でその船に乘つて海外に渡航しようとするものは船主に相當の金額を拂ひ、領主にも多額の金を納めて海に出ることが出來た。海上で海賊につかまつた時は金を與へて免れるといふ風でありました。

博多、山口、平戸

堺の外になほ九州の博多、周防の山口も貿易港として盛んになりました。その他に、平戸も亦開かれたのであります。そして平戸は、次第に發展して貿易の市場として必要な設備が出來たので歐洲の商船が我が國に來るやうになると、先づ平戸に集るといふ風でありました。「唐、南蠻の珍物は年々滿々と參り候間京堺の商人諸國皆集り候間西の都とぞ人は申しける」と大曲

記に書いてあります。

五、近古の時代

近古時代に入ると、歐洲の貿易時代に入りますが、それは先づポルトガル人の來朝に始まるのであります。抑も西洋諸國で日本の事を知つたのは、彼のマルコポーロがゼノアの戰に捕はれて獄中に下つた時、獄中で東洋紀行を同囚のものに筆錄させたのに始まるので、その書物の中に、東洋に日本といふ國があつて、その國人は色は白皙で身體は强健、風俗雅良で、君を立てて政治を爲し、外國の隷屬になつたことがない、それは日本の民が强勇無比であるためで、殆んど亞細亞大陸を併呑したばかりでなく歐洲にまでその勢を揮つた元の軍兵すら敗れて退いた、といふことを記してゐるのであります。

マルコポーロ

マルコポーロは後宇多天皇の御代（西暦一二七五年）十八歳で父や伯父と共に支那に來て、韃靼語に通じ、元の太祖に仕へ居ること二十年、伏見天皇の御代(西暦一二九五年)にイタリーのヴェニスに歸つたのであります。マルコポーロがイタリーのゼノアに齎した支那及び日本の地圖が後になつてコロンブスの手に入つたのであります。コロンブスは、地球が圓いといふことを信じ大西洋を横切つて、西へ西へと行けばきつと地球の反對の側に達するに違ひないとし後土御門天皇の御代(西暦一四九二年)にスペイン王を説いて大西洋の直航を試み一四九二年米大陸發見となつたのであります。或はコロンブスが新世界を發見せんとしてスペインを出帆したのは、その志は、日本にあつたのであるといふ説もあるのであります。

東洋の新航路

當時歐洲で東洋の新航路を發見せんとしたのは一つには東洋の產物が欲しかつたのであります。天の惠みは東洋に厚く西洋に薄いのであります。その一二を擧げれば、東洋には絹糸があり、砂糖があり、茶があり、煙草があるといふ有樣で、歐洲諸國はこれ等の亞細亞の物產を

得ようとしたのであります。

ポルトガル人がマラツカを略取したのは、後柏原天皇の御代（西暦一五一一年）で、その後五年の後、一五一六年、その艦隊が廣東に來て貿易を開かしめて以來、ポルトガルの商船は絶えず寧波（ニンポー）、媽港（マカオ）、その他の支那の海岸に來たのであります。その後、後奈良天皇の御代、天文十二年（西暦一五四三年）に、ポルトガル人を乘せた船が一隻九州大隅の種子島に漂着したのであります。この時このポルトガル人が我が國に初めて鐵砲を傳へたのであります。

種子島に鐵砲傳へらる

このポルトガル人三名はフェルディナンド・メンデス・ピントのほか、ボレロ、ゼーモトの三人で、ピントは冒險家でありましたが、適當の職業がなかつたので、同國人のボレロ、ゼーモトの二人を語らつて、支那海賊の仲間に入り、天文十二年の秋、媽港（マカオ）の近海のランパコウ島を出帆したが、海上、忽ち他の海賊に襲はれて、互に鐵砲の擊ち合ひをしたが、俄に暴風に遇ひ、船長の支那人は嘗てその地理を知つてゐるところの琉球に向つて船を走らせ漂流すること

二十三日で、遂に種子島に着いたのであります。即ち天文十二年（西暦一五四三年）の秋でありました。この支那人の船長といふのは、支那海賊の巨魁であつた王直でありました。

薩摩の僧玄昌が、種子島の島主種子島久時に代つて作つた「鐵砲記」に、隈州之南有一島、去州一十八里、名曰種子、我祖世々居焉、天文癸卯秋八月二十五丁酉、我西村小浦有一大船、不知自何國來、船客百餘人、其形不類、其語不通、見者以爲奇怪矣、其内有大明儒生一人、名五峯者、今不詳其姓字、時西村主宰有織部丞者、頗解文字、偶遇五峯、以杖書於砂上、云船中之客不知何國人也、何其形之異哉、五峯卽書云、此是西南蠻種之賈胡也」（大隈國の南に一つの島があつて、九州から距る十八里、種子島といふ。我が先祖代々ゐるところであります。天文十二年の秋八月二十五日、（西暦では一五四三年の九月二十三日の事）わが西村の小浦に、一艘の大きな船が着いてゐました。何處の國から來たのか分りませんでした。船上には百人餘の人が乘つてゐました。様子がかはつてゐて、言葉が通じません。皆見て變だと思ひました。その中に一人五峯といふ文章の書ける支那人がゐました。姓は何といつたか今は分らないのですが、その時、西村の地頭織部丞といふものがゐて、その人は學問のある人でした。ちやうど、その五峯

を見出して、携へてゐた杖で砂の上に字を書いて筆談をしたのでした。船中の客は何處の國人か知らないが、様子が實にかはつてゐるがと書いて問ふと、五峯は、これは南方から來た商賈人ですと書いて答へたといふのです）といふことが書いてあります。大阪朝日の故天囚西村時彦は織部丞の後で、「南島偉功傳」の著があり、その中で「鐵砲記」を解説してゐるが、「西村は西之村と云ひ、今は西之と字せり、島の南端にして小浦は村南岬角の東に在り。右手は屋久島と相對し、左手は渺々たる太平洋に面し、懸崖千仞、絶壁削るが如く、巨濤洶涌、亂礁碎けんと欲し、東端纔に一帶の沙灣を開き、白沙青松風景甚佳なれども、漁舟の外は巨船を泊すべくもあらず。太平洋上より未到の島影を望見したる灣泊船は、兎も角もとて此の沙灣を擇めるなるべし」と書いてゐる——花園）この五峯は卽ち王直であつて、呂宋、安南、暹羅、滿剌加（マラッカ）等をぐるぐるまはつて、我が國の海賊にも信用され、常にその貨物の問屋をなしてゐたものであるが、今ポルトガル人を導いて、我が國に來たのでありました。そして、ポルトガル人等は、土地の人々の厚遇を受け、また艦長である支那人は、當時支那で僅かに二千五百兩の價格の貨物を賣つて十二倍の利益を得たといふことであります。ピントたちは支那から鐵砲を持つて來たの

で、一挺の銃で、紙鳶一張と鳩數羽を射落して見せたので、地頭その技に驚き意を竭して待遇し、遂にその銃二挺を手に入れ、火藥の製造法を傳習して、その報酬として銀一千兩を贈つたのでありました。この事が、豐後の領主大友義鑑（義鎮の父）に知れたので大友は使者を遣して種子島にゐたポルトガル人一人を迎へしめたのでありました。ピントは豐後に着き領主に會ひ、一ケ月ばかり滯在して、銃や火藥の製造法を傳へたのでありました。そしてピントは種子島に歸ると、支那船が歸國の用意が出來てゐたので、一行のものたちはそれに乘つて恙なく寧波（ニンポー）に歸り着きました。すると、同地に住むポルトガル人たちは驚き迎へて今度ピント一行が日本といふ豐饒な國を發見したといふので、これから日本に新販路を開拓しようといふことになり、支那人はこの機會に乘じて商品の價格を騰貴せしめたといふのであります。その後、半月も經たないうちに、寧波から日本へ向け出發した商船が九艘の多きに至つたといふことであります。一方暹羅から漂着したポルトガル人の報告によつて貿易を鹿兒島に開いたものもある。一方、種子島に漂着したポルトガル人の報告によつて寧波から商船が出るといふ有樣で、日本とポルトガルとの貿易が初めて行はれることとなり、ポルトガル人たちは、我が市場に適當な

商品を印度や支那から集めて、歐羅巴の品物だといつて、我が國に持つて來て賣つて大いに儲けたのでありました。彼等が初めて我が國に來るや、至るところで我が國の人々から厚遇を受け、我が國の富商の娘たちと結婚するものも多く、日本とポルトガルとの貿易は、非常に盛んになつたのであります。天文十六年に、ピントは再び我が國に來ましたが、マラッカ、媽港、寧波から來たポルトガル船を鹿兒島港に列べて、その市場には、支那や歐洲の貨物を山の如くに積んで、中々貿易は盛んでありましたが、我が國人も種子島に鐵砲が傳つて四年にもならないのに鐵砲や火藥の製造法に熟練して大いに彼等を驚かしたといふのであります。天文十九年になると、ポルトガル船は平戸に入つたので、盛況は平戸に取られ、鹿兒島港の商人は、貿易から利益を得ることが出來なくなりました。平戸は、港内靜かで、四方交通の便があり、貿易に必要な各種の幾關も備つたので、平戸は貿易の中心地となり、王直も平戸に唐樣の家を立て居住することとなり、ケンプルの日本歴史には、當時日本はまだ鎖國せず、大小名は將軍に絶對服從であつたので、日本人の國内又は海外の旅行自由であり、外國の人民と雖も、亦國中どこの港にでも、便利とする場所に自由に入港することが出來たばかりでなく、九州の諸大名

は實に彼等を歡待し、貿易を開いて各々その利益を得ようとしたため、諸大名の間に競爭が起り、各自自分領内の港をして外人の撰擇に適せしめんとし、殆んど二十餘年の間、ポルトガル人と日本との貿易は、まことに旺盛を極め、歐洲及び印度の藥種、織物、その他の雜貨を盛んに輸入し日本の黃金と交換して儲けたことを書いて居ります。

キリスト教の勢力

ポルトガル人が九州平戸に移つてから二十年間は、その貿易の最も自由な時代でありました。その時、ちやうど、カソリック教の僧侶が我が國に來て、初めは貿易の旣に開けた鹿兒島、平戸の諸港で宣教するに止まつてゐましたが、そのうち豐後にも侵入して、宗教をひろめ、次第にその勢力が加つたので、貿易にも干渉し、平戸の領主が、彼等のいふところを許さなかつたので、腹いせに、横瀨、福田、長崎の諸港を開き、長崎の如きは遂にこれを占領して、カソリック寺院の支配の下におくといふことまでしたのでありました。時の人は、このカソリック教のことを切支丹、卽ちキリシタン宗といひましたが、キリシタンは、クリスチャンのことで、キ

リスト教をいつたのであります。このキリシタンが、當時の商業の歷史に非常に密接な關係を持つに至つたのであります。

キリスト教は、源は一つでありますが、國によつて宗派の別が生れ、ローマ帝國がコンスタンチノーブル（今日のイスタンブール）に移つてから、その教が東西に分れ、ギリシアで行はれるものはギリシア教となり、ローマで行はれるものはローマ教となり、このローマ教が歐洲全體にひろがると、その首長であるポープ、卽ちローマ法王は、殆んど全歐羅巴のローマ教徒の長となり、その威力が益ゝ加はるに隨つて、諸國の帝王の廢立に干渉したり、その地を蠶食して寺領に加へ、またブル（bull）といふローマ法王の命令を出して、諸國王に他國を侵略するの權を與へるに至つたのであります。法王の專横がかういふ風でありましたので人心漸くその干渉を厭ひ、正議によつてその教權に抵抗するものを生じ、これをプロテスタント(Protestant)教といひました。プロテスタントは所謂新教で、ローマ法王に抗議し、異議を申立てる、卽ちプロテストすることであります。併しまたその教權を一般に行强しようといふ法王黨もあり、これをカソリック(Catholic)教といつたのであります。カソリックは、初め一般のキリスト

教全體の意味でありましたが、プロテスタントに對して、ローマン・カソリック(Roman Catholic)が出來たので、これを舊教といひ慣はしましたが、この中にまたフランシスカン派(Franciscan)と、ジェズイット派(Jesuit)等の教派が出來るやうになりました。フランシスカン派は、主としてスペインに用ひられ、ジェズイット派は、專らポルトガルに用ひられまして、一つは太平洋中某の經度より以東を、一つは同線以西を占領すべき免許狀をローマ法王に得、各東西に分れて、共に宗教の版圖を擴張せんことを謀つたのであります。(卽ち、當時スペインとポルトガルとが、新發見の領土に對してその歸屬を爭つてゐましたが、コロンブスが西印度諸島を發見した後、遂に當時の國際慣例により、ローマ法王が問題の決裁をすることになり、法王アレキサンダー六世は、アゾーレス群島及びケープ・ヴェルデ群島の西百リーグ、一リーグは三哩ばかりですが、大西洋を北極から南極へかけて一線を劃し、この子午線の西に當り、發見せらるべきキリスト教ならざる凡ての國土にして未だキリスト教國に屬せざるものは、スペインのものたるべく、この指定された子午線の東の、これ等の國土はポルトガルのものたるべしと宣言したのでありました。この區劃の線は、その後二百七十リーグ西に移動されることに決りました。卽ちケープ・ヴェルデ群島の西三百七十リーグの子午線と定められたのであります。最後に、右の區劃線の西百八十度の子午線が定められ、かくして世界はこの線內に二分され、新發見の國土の所屬が、スペインとポルトガルとに歸するやうになつたのであります。)當時のポルトガル、スペイン兩國の人たちにして、海に航し地を求めた人たちは半ばは勇士で、半ばは冒險家でありましたので、或は商人となり、或は海賊となり、隨分至るところで亂暴をしたもので、勝手に土地を略奪し、土人を皆殺しにするといふ風でありました。キリシタンの僧侶たちも、俗世界の一人であるから、自然彼等が大いに植民の業を起したのを見れば、俗世界の動きに誘はれて、同じ方向に向ふのは仕方のないことで、彼等の十字架は武器と相待つて、自國の海外版圖を開くといふことになつたのであります。我が國に來ては、我が國の武力が、彼等の橫行を許しませんでしたが、彼等は隱々の中に、野心を藏して、國家傾覆の計畫を持つものもありまして、我が國はその措置に苦しまなければなりませんでした。

ザヴキエールの渡來

嘗て、ポルトガル商船が鹿兒島に來た時、アンジラウ（一つに名を了西といふ）といふものがあり、そのポルトガル船に便乘して印度の臥亞（ゴア）に行き、そこでキリスト教を學びましたが、臥亞に居留してゐたフランシス・ザヴ＊エール（Francis Xavier）を誘つて我が國に來てキリスト教を布教せしめたのであります。臥亞は當時ポルトガル領で、總督のゐた都でした。ザヴ＊エールは、ロヨラと共にジェズイット教會の創設者の一人で、東方傳道のため印度に來てゐたのであります。天文十七年十二月二十四日（西暦一五四九年一月二十一日）ザヴ＊エールが、その本國に送つた手紙に、「キリスト教に入信した日本人から、彼國には良僧あらざるを以て純良の民を得ざることを聞き、益ゝ渡海の念を增した。この日本人は八ヶ月を出でずしてポルトガル語に通じ、讀み書きが出來るやうになつた。キリスト教の大意も會得した才智のあるもので、このもののいふことであるから間違ひはあるまい」といふことがあります。かくしてザヴ＊エールは、コスムド、トレー及び他の一人の僧徒を從へ、アンジラウと一緒に、臥亞を出て、天文十八年七月二十一日（西暦一五四九年八月十五日）に鹿兒島に着いたのでした。鹿兒島に着くと、アンジラウは、ポルトガルの船に乘つて久しく印度に行き、一種の新しい教を學

んで歸つたと評判をしたので、薩摩の領主は、アンジラウの旅行中の奇談を聞かうと思つて召したので、アンジラウは新しい教のいいことを口を極めて說いたのであります。そしてザヴ＊エールも領主に謁見することが出來たのでした。ザヴ＊エールは領內布教の許を受け、頻りに宣教に從事したので、教法次第に鹿兒島に行はれ、翌年の初めには、信者の數實に百人に及んだといふことであります。これが我が國にキリスト教の入つた最初であります。

そのうち薩摩の領主の心が變つたので、遂に彼等は薩摩から放逐されることになりました。その原因は、常に鹿兒島に來るポルトガルの船が、その年は鹿兒島に來ないで、平戸に來たため、貿易の利益が、鹿兒島と仲の惡かつた平戸に取られて了つたことと、平戸の領主に薩摩と戰ふべき兵器を送つたことによるといはれて居ります。ザヴ＊エールは、いろいろ商人は利益が目的だから平戸へ船を着けたので、來年は薩摩に來るからといひ、我々は宗教家であつて、商人に向つてかうしろ、ああしろといふことは出來ないといふことを領主に申したけれども受容れられませんでした。そこで、ザヴ＊エールは、平戸は自分たちを放逐した薩摩の敵とすれば平戸に行くがよからうと、平戸に向つて出發しました。平戸に着くと、同地にゐたポルトガ

ルの商人たちは、ザヴ・エールが有德の僧であることを知らしめるために祝砲を擊ち、軍旗を揭げて、盛儀をつくして迎へたので、平戸の領主もこれを厚遇し、薩摩の領主を怒らせようとして即座に平戸領内で宣教することを許したのでありました。彼等が領主の城下に出て說教を始めるや、彼等は既に鹿兒島にゐて、我が國語にも通じてゐたので、そのいふことを聽かうとして多くの人が集りました。聽くものは中々感動して、二十日を滿たざるに洗禮を受けるものの數は、鹿兒島で一年の間に受けた人の數より多かつたといふことであります。

ザヴ・エールは平戸で多くの信者を作りましたが、この上は、京都が日本の中心であるから恰も法王の祖先がローマを中心として、その教を廣く傳播せしめたやうに、京都から日本全國にキリスト教を弘めようとして京都に赴きました。併しザヴ・エールは佛教徒の反對によりこの企てに失敗したので再び平戸に歸り、更に歐洲の珍しい物を持つて山口に行き、領主大內義隆に獻上したりしてその領內で宣教することを許されたのであります。それから豐後府內（臼杵）に往き、大友義鎭を教化したが、志を得ず遂に印度へ歸つたのであります。その後多くの宣教師が渡來して布教につとめたので、キリスト教は一時非常な勢で九州に弘まつたのであり

ます。九州にキリスト教が盛んに行はれると同時に外國貿易も盛んになつたのであります。當時、平戸のキリシタン僧徒は次第に政治の方面にも干涉し、領主を苦しめてその法權に屈服せしめようとして失敗すると、腹いせに大村の領主大村純忠と結び、貿易の市場を平戸から大村領內の橫瀨浦に移したりしました。それでも商業上の利益は固より宗教のよくするところではなく、平戸にはやはりポルトガルの商船が來泊しました。當時は織田信長の時代でしたが、大友宗麟、有馬義純、大村純忠の三キリシタン大名は、ローマ法王及びカソリック教僧徒の本國であるポルトガルを兼有してゐたスペイン國王に使節を送つたのであります。使節の出たのが天正十年正月で、織田信長は六月に明智光秀に本能寺で殺されたのであります。使節はみな十三歲から十五歲までの少年でありまして、天正十年卽ち西曆一五八二年正月に長崎を出て同十三年（一五八五年）二月にローマに達して居ります。長崎を出てから三年一ケ月と二日の年月を經て居ります。一行の正使は大友の配下に屬した日向の領主の伊東の一族で、伊藤義賢（よしかた）といふ十三歲の少年、キリスト教の名をマンショ（Mantio）といひ、他の一人は有馬晴信の近親の千々岩淸右衞門、キリスト教の名をミヘル（Miguel）といひ、なほ中浦ジュリアン（Julian）と原マル

ルの商人たちは、ザヴィエールが有德の僧であることを知らしめるために祝砲を擊ち、軍旗を揭げて、盛儀をつくして迎へたので、平戸の領主もこれを厚遇し、薩摩の領主を怒らせようとして卽座に平戸領內で宣敎することを許したのでありました。彼等が領主の城下に出て說敎を始めるや、彼等は旣に鹿兒島にゐて、我が國語にも通じてゐたので、そのいふことを聽かうとして多くの人が集りました。聽くものは中々感動して、二十日を滿たざるに洗禮を受けるものの數は、鹿兒島で一年の間に受けた人の數より多かつたといふことであります。

ザヴィエールは平戸で多くの信者を作りましたが、この上は、京都が日本の中心であるから恰も法王の祖先がローマを中心として、その敎を廣く傳播せしめたやうに、京都から日本全國にキリスト敎を弘めようとして京都に赴きました。併しザヴィエールは佛敎徒の反對によりこの企てに失敗したので再び平戸に歸り、更に歐洲の珍しい物を持つて山口に行き、領主大內義隆に獻上したりしてその領內で宣敎することを許されたのであります。それから豐後府內（臼杵）に往き、大友義鎭を敎化したが、志を得ず遂に印度へ歸つたのであります。その後多くの宣敎師が渡來して布敎につとめたので、キリスト敎は一時非常な勢で九州に弘まつたのであり

ます。九州にキリスト敎が盛んに行はれると同時に外國貿易も盛んになつたのであります。當時、平戸のキリシタン僧徒は次第に政治の方面にも干涉し、領主を苦しめてその法權に屈服せしめようとして失敗すると、腹いせに大村の領主大村純忠と結び、貿易の市場を平戸から大村領內の橫瀨浦に移したりしました。それでも商業上の利益は固より宗敎のよくするところではなく、平戸にはやはりポルトガルの商船が來泊しました。當時は織田信長の時代でしたが、大友宗麟、有馬義純、大村純忠の三キリシタン大名は、ローマ法王及びカソリック敎僧徒の本國であるポルトガルを兼有してゐたスペイン國王に使節を送つたのであります。使節の出たのが天正十年正月で、織田信長は六月に明智光秀に本能寺で殺されたのであります。使節はみな十三歲から十五歲までの少年でありまして、天正十年卽ち西曆一五八二年正月に長崎を出て同十三年（一五八五年）二月にローマに達して居ります。長崎を出てから三年一ケ月と二日の年月を經て居ります。一行の正使は大友の配下に屬した日向の領主の伊東の一族で、伊藤義賢（よしかた）といふ十三歲の少年、キリスト敎の名をマンショ（Mantio）といひ、他の一人は有馬晴信の近親の千々岩淸右衞門、キリスト敎の名をミヘル（Miguel）といひ、なほ中浦ジュリアン（Julian）と原マル

チノ（Martino）が副使となつて行つたのでした。ローマに入ると盛大な威儀を備へて法王グレゴリウス十三世に謁見致して居ります。この使節は天正十四年にスペインを發し、十八年に歸朝しました。

秀吉カソリック教僧徒を放逐す

この少年使節が長崎に歸つた時には、國内の形勢一變して、豐臣秀吉の時代となり、秀吉は九州を平定するや、疾風迅雷的にカソリック教僧徒の放逐を實行したのであります。そして先づ第一に、彼等が占領してゐた長崎港を沒收したのであります。かくして、ポルトガル人に占領されてゐた我が國の一港も遂に恢復することを得、カソリック教の僧徒が、積年苦心の效驗はすべて雲烟消散したのであります。天正十五年六月十九日を以て、二十日以内に僧徒の退去を命じたのであります。カソリック教徒はこの令を受くるや、我が國から印度臥亞に赴くべき船便がないので六ヶ月の猶豫を乞ひ、更に六ヶ月を經ても口實を設けて退去しないものが多かつたので、秀吉は怒つて南蠻寺を破壞し、僧徒を召捕へしめたのであります。そして、天正十

六年五月遂に長崎港を沒收して、中央政府直轄の地としたのであります。

遣羅使節が日本に歸つ　來たのは、天正十八年六月二十日（西暦一五九〇年七月二十一日）でありまして、使節をつれて行つたカソリック教僧侶アレクサンドル・ワリニヤニ（Valignani）は我が國の反カソリック政策のことを知つて、いろいろの贈物をととのへ　臥亞總督の手紙を持つて長崎に着いたのでありました。太閤に贈つた品物は、

劍二口
銃二挺
アラビヤ馬（馬具共に）二匹
劍附の拳銃一挺
金錦の帷幔一帳
印度の天幕一帳

などでありました。手紙は、宣教に對する感謝狀でありまして、太閤もこの手紙と進物とを見て喜びましたが、カソリック教の跋扈は、國家の安全を脅すといふ信念は變へることが出來ず、

文祿元年六月十四日(西暦一五九二年七月二十五日)ワリニヤニが我國を辭して印度に歸るや、秀吉は、宗教を拒絶し、貿易だけを盛んにしようとするに至つたのであります。

秀吉は二回に亘つて朝鮮に「徒勞なる」出兵をしたばかりでなく、またフィリッピンをも伐たんとする志もあつたのであります。

秀吉の比島攻略の野心

秀吉をしてフィリッピン攻略を實行させようとしてこれを說いたものは、原田孫七郎でありました。フィリッピン群島は我が沖繩の南に接する群島で、その最も大なる島を呂宋及びミンダナオとなし、群島の面積は、日本帝國(朝鮮と臺灣とを除く——花園)に相比すべき地方であります。美麗な植物に富み、麻、砂糖、煙草の如き同島の產物として知られて居ります。その群島には古來マレー人種が住んで居りました。西暦一五二〇年(後柏原天皇の永正十七年)地球を一周したスペインのマジェラン(Magelan)が、南アメリカの南端を廻航し、太平洋を橫斷して、一五二一年比島に達したのです。その後、比島のマニラ港と、ノヴア・イスパニア、

今日のメキシコのアカプルコ港との間に商船の往復あり。貿易は益ゝ盛大となつたので、スペイン王フィリップ二世は、メキシコ總督にフィリッピン群島占領を命じたのでした。そこで、ロペス・デ・レガスピ提督がこの群島を占領し、これをフィリップ二世の名を取つて、フィリッピン群島と名づけたのでありました。

呂宋貿易

このフィリッピン群島には、スペイン人の外、支那人の出稼が多かつたのです。支那の福建省廣東省に近く、汕頭(スワタオ)からは僅かに二百四十里に過ぎないので、群を成して渡つて來たので、百より千、千より萬といふやうに來たので、呂宋附近は、無數の支那人の住むところとなりました。當時は、明末の政が既に衰へ、本國は不安であつたものですから、支那人の移住熱を强めたのでした。これは「深く異とするに足らざれども、ここに驚くべきは絕東の日本人種が蚤(はや)く已(すで)に西班牙人と同じくこの地に植民し居たること是なり。而して日本人種が固有の美質なる義勇心と廉恥心とは深く西班牙人及びマレー土人の親愛を惹起したることは彼の出稼支那人の廉

恥を顧みず、德義を重ぜず、射利の爲めには爲さゞる所なく、到らざる所なく、土人の職業を奪ひ、群島の富を運去るを憎んで、西班牙人土人相合して、屢〻支那人を驅逐したる際、日本人種の植民は曾て其災難に罹らざりしのみかは、屢〻西班牙人に一味して、支那人の驅逐に盡力したる一事を以ても之を見る」ことが出來るのであります。我が國人の呂宋へ往復してゐたものも多く、堺の町人納屋助右衞門が、我が國と呂宋との貿易に從事し、呂宋から呂宋壺を買つて來て太閤に賣付け、一時に金滿家になつたといふ話があります。「太閤記」には、太閤は、「泉州堺津、納屋助右衞門と云へる町人小琉球呂宋へ去年の夏相渡り文祿甲午（三年）七月二十日歸朝せしが……眞壺五十御目に懸けしかば、殊の外御機嫌にて、西の丸廣間に並べつゝ、千宗易などにも御相談ありて、上中下段に代を付させられし札を押し所望の面々、誰々によらず執候へと被仰出なり」とあります。呂宋島を當時小琉球といつたのであります。

原田孫七郎は、屢〻呂宋マニラに赴いて、その太守とも交り深く、早くスペイン語に通じ、頗る機智に富んだ人でしたが、太閤の向ふべき道は南であり、「太閤の朝鮮、支那を席卷せんとするの大に不得策なるを知つて、遂に大膽にも、太閤をして其の遠征の方向を、此廣大なる群島

に轉ぜしめ、盡くこれを略取して、日本の版圖に入れんとの企を起した」のであります。

世界列强の對峙してゐる關係はバランスであります。彼に一毫を加へるならば、我もまた一毫を加へて、權衡の平均を維持しなければなりません。太閤の支那併合の志も、列强間のバランスを保たんためであります。天正十三年（西暦一五八五年）カソリックの僧徒が大阪に赴いて太閤に謁見した時、太閤は、「余は國の平和を目的にしてゐる、平和の攪亂されるのをまづ取り除くことが必要である、そこで國内が平定されたならば、支那を征服して、我が國の利益としようと思ふ」といつた一語が、これを證するに足るものであります（日本西教史）。然し、支那は我が國とは古くから關係の多い國であります。それに國の人口が多い。共に鋒を爭ふべからざるには非ざれども、この兩國が戰ふとなれば、「兩虎の相鬪ふや、一は斃れ、一は傷かん、强敵のその隙に乘ずるものあらば、之に處する極めて」難くはないであらう。また安南や暹羅もあり、「英雄武を用ゆるの地なきにあらざれども、是皆大陸の地境を連ね壤を接す、縱令之を取るに易からしむるも、之を守るや實に難し、寧ろ呂宋は懸海の地、一たび之を取れば之を守る甚だ易く、外は境界の爭論を招くの患なく、内は海軍の威力を練るの益あるに若かんや。且や呂

宋の南ミンダナオ。ミンダナオの南、爪哇。スマトラ、以てマラッカ半島の東端に至るまで漸く之を蠶食して新嘉坡の海峽を扼せば一は以て支那の頭尾を束し、……一は以て歐洲諸國の東洋に於ける威力を殺て、日本の國境を固守するに足る。現に西班牙人のこの群島を占領せるを見よ。まづカソリック教を傳播して土人の心を收攬し、而して後徐ろに收めて其有となせるにあらずや。今彼の頻りにカソリック教僧徒を日本に送るものは亦同一の手段を以て日本を略取せんと欲するならん。我先ちて彼を制せずんば、日本も亦第二のフィリッピン群島たるの時機あるべしと。是原田が太閤の得る遠征の擧を起さんとするを見て之をして其方向をこの群島に轉ぜしめんとしたる所以にこそ」、原田は夙にかくの如き偉謀を抱いたのであります。そこで、原田は太閤に說いて、フィリッピン太守をして我が國に入貢せしめんことを以てし、書辭傲慢な太閤の書を太守に送らしめることに成功したのであります。太閤は激情の人なので、太守が怒つてその無禮を反問する使者を我が國に送り來るならば、必ずや太閤の遠征軍は直ちに進發するであらう。それは萬石の硝藥に向つて、一條の火線を通ずるが如くであつたでありませう。原因は一は太閤の自尊心を滿足せしめ、一はその結果を待つたのであります。

ところが、原田の考へてゐたこととは反對に、激越な調子の太閤の文書を受けて、太守は驚いたのでした。「誕生之時に際して、天下を治むべきの奇瑞有り。壯歲より國家を領し、十年を歷せざるに、彈丸黑子の地を遺さず、域中悉く統一す。……若し匍匐膝行遲延せば、速かに征伐を加ふ可きは必せり」といふ太閤の手紙を見て、太守は、本國の强大なるに拘らず、大に畏れ、使者を我が國に送つたのでありました。當時、太閤の遠征軍は旣に朝鮮に向つて進發し、所謂萬石の硝藥は今や移して庫中になかつたので、一條の火線は空しく冷滅し盡したのでありました。使者はいづれスペイン王に奏上した上でとか、何とかいつて歸つて了つたのであります。原田は再度マニラに渡つて太守に會見し、その素願をすてませんでした。太閤は、朝鮮並に大明征伐の後に、當時殆んど多事を極めたので、遂にフィリッピン群島に向つて兵を進めることが出來ず、慶長元年十一月十五日（西曆一五九七年一月三日）、太閤は、フィリッピンから來たカソリック教の僧徒二十六人を、禁制を犯してキリシタン宗門を傳へたるにより磔殺せしめたるに終り、原田の計畫は蹉跌したのでありました。

そのうちに太閤も薨じ、原田の事跡も分らなくなり、死んだところも分らないといふ有樣に

なりました。「嗚呼太閤をして、苟も原田が計畫を熟聽し、其朝鮮に向て發せしめたる遠征軍を轉じて之をフィリッピン群島に用ひしめなば、呂宋は長く我帝國を組織するの一分子となりしならんに、徒らに無用の地に兵を勞して連戰七年の久に至り、寸壤尺土も收むる能はざりしは、寔に千古の遺憾にこそ」、かくして我が國は商業の進路を遮斷して、全く杜絶し盡るに至つたのであります。

朱印船

徳川時代となり家康は朱印狀をもつて朱印船の外國との貿易を許し、免狀の無いものは貿易を許さなかつたのであります。これは家康は政治上面倒な事のないやうにとの考であつて、政治と離れて商業上の發展のみを考へたのであります　そして、關東の地と、ノヴァ・イスパニア、卽ち今のメキシコとの間に、太平洋を横ぎつて貿易の新路を開かうと企てたのでありました。

家康が呂宋に贈つた書に、「弊邦與濃毘數般欲修隣好」我が國ノヴァ・イスパニアとの修交關係を欲す）といふので、フィリッピン太守をして、毎年マニラ・アカプルコ間を往來する商船

に命じて、一度我が國の舟人を導かしめ、以て通じ難きの海路を通ぜんことを計つたのであります。これには、當時、我が國に漂流したオランダ船の水夫オランダ人ヤンヨーステンの說に聞いたもので、恰も英人で、水先案内人であつたウイリアム・アダムスが大きな船舶を作つた功も與つて力あり、後遂にこの計畫は實行されたのであります。

ウイリアム・アダムス

徳川家康は大いに海外の市場を開かうとしてゐましたところ、ポルトガル、スペインの外にオランダ商船に乘つて來て海賊の嫌疑で獄中にある者のあることを聞き、家康はそのものを召して見た所、一人は英人、一人はオランダ人で、通商を求めに來たのでありました。英人といふのはウイリアム・アダムス（三浦按針）であつたのであります。そしてオランダ人といふのはヤン・ヨーステンでありました。今でも御濠端の八重洲河岸などいふのは、ヤン・ヨーステンのゐた所で、日本橋の按針町といふのは三浦按針のゐた所であります。按針といふのは、パイロット、水先案内といふことであります。ウイリアム・アダムスは日本語にも通じ性質も正

しかつたので、家康はアダムスにあつい信用を與へ、西洋形の船、一隻は八十トンのもの、他は百二十トンのもの二艘を造らしめたのであります。この船は伊豆の伊東の海邊で造られ、江戸の淺草川の近傍につながれたのであります。丁度この當時スペインの船が日本近海で難破したので、この新しい船にスペイン人を乘込まして、ノヴァ・イスパニヤ、今のメキシコのアカプルコ港に送つたのであります。家康はアダムスの功を賞して相模國三浦郡逸見村に二百五十石の領地を與へたので三浦按針と呼んだのであります。三浦按針は元和六年（一六二〇年）に病死したので、その領地に葬り、逸見村の高い岡の上に一大墳墓を立てたのであります。「あゝ誰か家康を稱して妄りに外人を忌めりと云ものぞ」、家康は浦賀の一港を開いて關東の地に歐洲貿易の新市場を開かうとしたのでありまして、家康はウイリアム　アダムスを厚い禮を以て遇し、またカソリックの僧徒が江戸の市中に住することをも否まなかつたのであります。

家康の外交は專ら經濟外交でありまして、その點では支那と通商するためにマカオを占領したポルトガルや、臺灣に手をつけたオランダや、香港を領有したイギリスの如く活潑な活動をすることが出來なかつたのは惜むべきことであります。

家康の經濟外交

經濟外交を家康が强調したのは、太閤が武を朝鮮に示した後であつたことからも、自然の勢でありました。朝鮮とも修交を結ぶことに成功したが、若し朝鮮が和議を肯はずんは一戰して彼の國の米穀を刈取らせんといつたといふことでありました（外蕃通書）。一方、西洋形の船を造つて、貿易の新路を太平洋の東に開かんとしたことからも、家康は決して無事を貪るものでなかつたことは明かで、琉球を占領した一事はこれを證明するに足るものであります。併し、まづ太平洋の東に發展せんとせば、最も我が國に密接なる關係を有し、貿易の必要殊に多いものは支那であることを知るが故に「務めて其舊交を恢復せんことを謀り、其計畫の第一着手には、朝鮮をして我國に來聘せしめ、以て兩國の貿易を媒助せしめんことを試み、後、また琉球に向て同樣なる政略を試みしかども、遂に其目的を達する能はざりしかば、琉球を伐て、而して之を取り、之をして支那帝國に通商して我國の需要を充たさしめ」たのであります。

琉球

琉球は元來日本人種の繁殖したところで、言語から見ても、親を「オヤ」といひ、子を「クワー」といひ、耳を「ミミ」といひ、目を「メ」といひ、山川風雨その他日用の言語、皆內地と同語であり、稍轉訛したものであります。去年を「コゾ」といひ、顏附を「オモカケ」といひ、有りまするを「アイビル」(有り侍るの訛)、知りませんを「シヤビラン」(知り侍らぬの訛)といふやうに、琉球の言葉は、日本の言葉と同じなのであります。元來、我が國の南邊には數多の島があり、遠くフィリッピン群島に連なり、島と島との間は、遠きは二十里、近きは五六里でありまして、島から島へ傳つて往來することが出來るのであります。その最も內地に近いものは、種子島、屋久島、口の永良部島といひ、共に大隅國に屬し、次いで七島、卽ち、口の島、中の島、臥蛇島、諏訪瀨島、平島、惡石島、寶島(古の度感)といひ、外に硫黃島、黑島等を合して、薩摩國に屬したのです。古からこれ等の島と內地との間には交通があり、我が國の版圖であつたのは最も明白であります。次を奄美大島、喜界島(古の貴賀)、德島、沖の永良

部島、與論島といひ、次を沖繩島(古の阿兒奈波)、久米島(古の球美)といひ、次を宮古島、石垣島(古の信覺)、八重山島といひ、その最も南端に離れてゐるのは波照間島といひ北緯二十四度にあつてフィリッピン群島を距ること僅かに四五度の間のみ。これ等の島は早くから日本人種に占領されてゐたのであります。初め、熊襲や隼人などが漸く內地から驅逐されて海遠く島にかくれ、そこへ內地から移つて來るものも次第に增加し、新舊兩種の植民は各その言語風俗を遺留して、遂に琉球人といふものを混生したのであります。併し何といつても交通が不便なので、內地から交通したものは口の五島に止まり、後鳥羽天皇の御代、文治四年源頼朝が天野遠景、宇都宮信房等をしてこれ等の諸島を征服せしむるや、彼等は貴賀井島(喜界島)に至る諸島を略取したのみで、同島以南には及びませんでした。

朱印船制度强化

當時、薩摩では比島のマニラ港と、メキシコのマカブルコ港との間を往來するスペイン船が屢〻薩摩に來て貿易を經營するといふ風で、家康としては薩摩のやうな强大な大名をして、貿

易の利を專らにせしむることを欲しなかつたので、朱印船制度を强化するに至つたのであります。當時海外往復の文書は皆佛敎僧徒の掌る所で、朱印制度を擴張するや、豐光寺、圓光寺、金地院の三僧をしてその臺帳を管理せしめたのであります。これが異國渡航御朱印帳であります。この臺帳にのつてゐるものは中々多く、貿易先は安南國、占城國、呂宋國、シヤム（今のタイ國）、トンキン、カンボヂヤ、西洋國、密西耶國（これは今の中部フィリピンのビサヤであります）、ボルネヲ、マラッカ、臺灣等に及び、例へば慶長九年の朱印狀を受けたものの數は三十艘、慶長十年には三十六艘にも及んで居ります。

異國渡海御朱印帳に登記された慶長九年、十年の分を列擧すると、左の如くであります。

慶長九年海外渡航の朱印狀を受けたる者

安南國	正月十三日	尼崎屋又次郎	
同	八月六日	船本彌七郎	
同		高瀨屋新藏	

同	八月十三日	細屋喜齋	
同	八月十八日	安當仁	
同	八月二十六日	末次平藏	
占城國	四月十一日	西野與三	
呂宋國	六月六日	伊丹家味	
同	七月五日	平野孫右衞門	
同	八月十八日	安當仁	
同	八月二十六日	タナベ屋又右衞門	
信州	七月五日	高瀨屋新藏	
同	八月十二日	窪田與四郎	
暹羅國	八月二十五日	日本人、シヤムロに住居 與右衞門	
同	同	有馬修理	
同	閏八月十二日	島津陸奥守	

東京	八月二十六日	角倉了以	
同	閏八月十一日	榮住	堺
同	十一月二十六日	皮屋助右衛門	堺
大泥國	八月二十六日	今屋宗忠	日本人、シヤムロに住居
同	同	與右衛門	江戸
同	十二月十六日	大黑屋助右衛門	同
同	十二月十八日	檜皮屋孫兵衛	平戸
順化	八月二十六日	大助夫	明人
西洋國	同	林三官	
東捕寨國	閏八月十二日	島津陸奥守	
同	同	五島淡路守	平戸
同	同	傳助	
同	十二月十八日	六條二兵衛	

迦知安國	十一月二十七日	松浦法印	
計船數三十艘			
慶長十年海外渡航の朱印狀を受けたる者			
大泥國	正月三日	尼崎屋又次郎	
同	五月十八日	同人	京都六條
同	十二月六日	仁兵衛	
西洋國	四月二十六日	松浦法印	
同	五月一日	島津陸奥守	
西洋國	五月一日	五島淡路守	
同	五月三日	有馬修理大夫	
同	五月十二日	林三官	明人
同	七月三日	島津少將	
同	七月八日	鍋島加賀守	

西洋國	九月十三日	ドアンデイレイ	アントウニン・カラセス、日本名
同	同	甚右衛門	明人
同	九月十七日	林三官	長崎
同	十二月二日	喜安	
呂宋國	五月十一日	酒井宗普	
同	九月朔日	安當仁カラセス	
同	九月三日	田邊屋又左衛門	呂宋通事
同	九月十三日	ニシルイス	
同	同	平野孫右衛門	
東捕寨國	五月十六日	有馬修理	
同	七月二十八日	河野喜三右衛門	
同	九月十八日	船本彌七郎	
同	九月二十八日	長井四郎右衛門	

同	十一月六日	原彌二右衛門	
東捕寨國	十二月二日	豆葉屋四郎右衛門	
同	同	大黒屋長左衛門	
安南國	七月一日	島津陸奥守	
同	七月三日	同人	
同	八月二十八日	船本彌七郎	
同	九月十九日	原彌二右衛門	
占城國	八月二十八日	有馬修理大夫	
東京	九月三日	角倉了以	
同	九月十日	皮屋助右衛門	
密西耶（サイヤ）國	九月十三日	窪田與四郎	大阪藥屋
艾（ボル）萊（キ）國	十一月十五日	甚右衛門	

計船數三十六艘

朱印狀を受けたもの慶長九年船數三十艘、慶長十年三十六艘、慶長十一年十七艘、慶長十二年二十艘、慶長十三年六艘、慶長十四年十二艘、慶長十五年八艘、慶長十六年六艘、慶長十七年六艘、慶長十八年十八艘、慶長十九年十七艘、元和元年十六艘、元和二年六艘でありまして、慶長九年から元和二年まで十三年の間、商船の朱印狀を受けたもの百九十八艘に及んでゐるのであります。その船主は大名である場合もあり、商人もあり、或は海外に居留する日本人もあり、日本に居留する海外人もあります。何れも、我が國の渡海免狀を得て、その保護の下に東洋貿易の安全を得ようとしたことは、呂宋のシンニヨロ（彼の所のシンニヨロと申、商人の司、並にカピタンと申、是は船頭の司、大日本商業史四六九頁——花園）、マルトロメクイナが、呂宋渡海の朱印狀を受けた一事でも分ることであります。當時、日本商船で西洋諸國に渡航するもの二十二艘の多きに及んで居ります。「今や我國開港以來三十餘年商船の西洋諸國に渡航したるは前後果して幾艘かある、是亦た眞に新日本と云ふべき歟」（安政五年、西曆一八五八年、幕府開國條約を結び、二百二十五年の鎖國を破る、菅沼貞風明治二十二年、一八八九年、マニラに客死す——花園）

朱印狀を受けたものの中には日本人・シヤムに住居、といふものもあり、明人といふものもあり、

アントウアン・カラセス、日本名甚右衞門あり、キリシタンバテレン、トウマスあり、ヤヨウスあり、また長崎の唐人ヘッケルなどあります。角倉了以もあります。加藤肥後守、島津陸奥守、本多佐渡守正信などもあります。呂宋との貿易をしてゐた堺のニシルイス（西類子）には呂宋通事と書いてあります。西洋諸國に渡航したもの、二十二艘の多きに及べるを見る時は、その時代の日本海外貿易の想像以上に盛んであつたことを思はなければなりません。當時の西洋といふのは、安南、シヤム今のタイ國等をいつたもので、今日の西洋ではないといふものもあるが、慶長十八年我が國がカソリック教を拒絶したことを、攘斥西洋國宗旨と記されてゐるのを見れば、西洋といふのは、吾人の所謂西洋といふ意味であると存じます。ポルトガル領印度の副主から、「日本商人此方へ不參候樣に被仰付可被下候はゞや、當年も日本船參候間迷惑仕候」ともある。アフリカを迂廻して西洋諸國に渡航したとしても怪むに足らないのであります。況んや豐後の領主が使者を西洋に送つてから二三十年にもなる。當時活潑進取な日本人が西洋に一航を試みるものなかつたとするのがむしろ奇異となすべきであるのであります。

日本町

當時呂宋にも、安南にも、カンボヂャにも、今のタイ國にも日本町といふのがありまして相當の數の日本人が行つてゐたのであります。日本人の居留民の間には、カンボヂヤの義勇兵になつて、その獨立を助けたものなども居りました。徳川氏に政權が歸してから、天下平定し、天下の豪勇たちは、國内には、最早驥足を伸ぶる地がなくなつたので、その鋒先を海外に轉じたものもゐたのであります。徳川二代將軍秀忠の時代には非常に消極的となり、日本の海外發展は下り坂となつたのであります。世の中は弱肉强食の世界である。優勝劣敗の世界である。スペイン人は如何にして、マカオを領有したか、彼等は强奪であつたではないか、自國の利益增進のみ知つて、他國の利益を損害するも毫も厭ふところではなかつたのであります。「我國のみ、高尚な道徳主義に依つて何の益するところぞ、家康にしてフィリッピン群島を經略して、あらんには、東洋貿易の權は我國の掌權に歸」してゐたであらうに、全く遺憾千萬のことであります。

ポルトガルやスペインと比べてオランダやイギリスは我が國との貿易では稍ゝ遲れたのですが、慶長十六年オランダ船がジヤヴァに歸る時、家康の顧問であつた英人ウイリアム・アダムスは一書を商船に托して、ジャヴァにゐたイギリス人に宛て、日本には金銀多く、人民はこれを歐洲の緞子物や鉛その他の歐洲の品物と交換したいのであることを述べ、日本の風土を論じ日本人は性質善良にして禮儀正しく、勇敢死を畏れず、法を守ることを書いて送つたのであります。

ジョン・セーリス

そこでイギリス王ゼームス一世は親翰を持たしてジョン・セーリスを日本に向はしめたのであります。この一行は平戸に來て、領主を船室に招待して、宴を開き、音樂を奏して饗應し、宴終つて後、イギリス王の書を出して領主に示したのであります。その書翰は、日本に貿易を求めたものでありました。

家康は駿府に於て禮を厚くして、セーリスを待ち、答書を作る間、江戸に赴いて、新將軍に

調せしめたのであります。

セーリスの日記によれば、伏見から馬と駕籠で七日で當時家康の居城であつた駿府に達したが、駿府の盛大なことロンドン以上である。駿府を出てから四十八時間で江戸に達したが、途中鎌倉の大佛を見たとあります。江戸には大きな家々が並び立ち、戸や柱には金を貼し、漆を塗つたりして壯麗言ひ盡し難し、と書いて居ります。

セーリスはウイリアム・アダムスを通譯として、家康に謁見し、英國王ゼームス一世の書翰及び進上物を呈したのでしたが、そのゼームス一世の書翰の譯文は次の通りであります。これは、ウイリアム・アダムスが譯したものだらうと思はれます。

ゼメシ帝王(ゼームス一世)書狀の趣は天道の御影によりホウブリタンヤ國(大不利顛國)フランス國、エランダ國、この三ケ國の帝王に此十一年以來成申候然は日本の將軍樣御威光廣大の通我國に慥に相聞候爲其「カピタン、ゼネラル」ジュワン、サイリス此等を名代として日本將軍樣へ御禮爲可申渡海させ申候如此申通に罷成候へは互に國の樣子廣大と流通仕我國の滿足の處不淺候於向後者毎年商船あまた渡海させ雙方商人を爲入魂互の望物商賣可被仰付候

其上日本將軍樣御意の旨於御懇情は商人を當國に殘置彌多分懇和可被成候然上は我國へも日本の商人を自由に呼入日本の重寶の物を調法させ賣買可申付候於此上は幾久申通日本へも無心疎用可申入候條被成其御意得可被下候

ホウブリタンヤ國の王
居城はオシメシタ
ゼメシ帝王
レイキシ

日本將軍樣

この書は、アダムス我が國に在ること十數年、アダムスによつて譯されたものと思はれます。この書によると、當時英國王ゼームス一世は、我が國にその商人を居住せしめて、毎年商船の往來を開くことを希望し、その報酬としては、我が國の商人をも自由に英國に入り込ましめ、且つその人民をして自由に日本の重要の品物を需要せしめんと欲したのであります。(このレイキシは國王印といふ意味の國王といふことで、Rex のことであります——花岡)

幕府の答書はイギリスの申出を受容れました。イギリス人がまだ平戸に來なかつた時は、オランダ人が織物を輸入し、一ヤール十七弗、歐洲の價格の約十倍でありましたが、イギリス人との競爭となり、織物の價格はずつと下つたのであります。これが日本とイギリスとの貿易の始めでありまして、慶長十八年、西暦一六一三年であります。セーリスは京都見物の後、平戸に歸り、慶長十八年十一月五日(十二月五日)、平戸から船に乘つて、慶長十九年八月二十四日(西暦一六一四年九月二十七日)英國に歸着しました。

朱印船の制度が次第に强化されると「飛乘」といふことが行はれるやうになりました。飛乘といふのは、支那に渡る船の底に隱れてゐて、沖に出てから船頭に事情を告げて支那に渡るといふことでありました。今日の密航であります。この飛乘をしたものの中最も著名なものがシヤム、今のタイ國に渡つた山田長政でありました。長政は伊勢山田の人で、飛乘で高砂、今の臺灣に渡り、更にシヤムに渡つたのであります。當時臺灣は、我が國から南方の國々に往來しようとするもの、または支那の商人と密貿易しようとするものが集つてゐたところでありました。關ヶ原の役の後、大阪の陣の落武者たちも商人となつて、商船に飛乘して身を海外に寄せたも

のも多かつたのであります。

高砂國

元和元年海外渡航の朱印狀を受けたものの中に、高砂國といふのがありますが、これが臺灣です。臺灣を占領してゐたのは、我が國の海賊でありましたが、鄭芝龍のやうな支那人が首長であつたこともあります。鄭芝龍が去ると、また海賊が首長となりました。オランダ人が我が國に來るやうになると、臺灣を占領して、我が國の貨物を支那に輸入する地とせんために、寛永元年四月、初めて臺灣に來て、寛永三年に至り、遂にこれを占領しました。オランダ人は總督をおいて臺灣統治に當り支那から移住したものが米や砂糖を耕作して輸出するものに莫大の稅をかけたのであります。オランダ人より六年も早　この島に來てゐた日本人たちは、納稅に反對したので、オランダ總督は、印度に行く日本の商船でその近海を過ぐるものを奪つたり乘組のものを殺したりしました。それでも當時臺灣に來てゐた日本人は、江戸政府の最も忌める海賊の徒であつたので、江戸政府に訴へることも出來ず、空しく恨を呑んで居りました。偶

偶長崎の代官末次平藏の唐船造りの商船、福州から渡海する途上、臺灣の前で、オランダ人に掠奪されたので、彼等は初めて江戸幕府にオランダ人の跋扈を訴ふる機會を得たのでありました。なほまた臺灣に來た長崎の商人濱田彌兵衛も　これを長崎奉行に訴へたのであります。濱田彌兵衛は奉行の許を得て、諸浪人數十人を從へて臺灣に渡り、オランダ總督を捕虜にしたり、大活躍を致したのであります。若し江戸幕府にして、「濱田が如き者を派遣して、之に數多の浪人勢を附屬し、彼の海賊の徒を助け、遂に阿蘭陀人を逐はしめば、一擧して高砂を占領するは容易なりしのみ」當時の外交政策は、「他國に厚くして自國に薄かりし」ものといはなければなりません。

大體江戸政府の政策といふものは、外國との關係は、一切經濟的のものだけに止めて、政治的な、かかはりを有ちたくないといふのがその立前でありましたから、進取の氣性が次第に失はれて來ました。一方、カソリック教徒の陰謀といふものに、江戸政府は、常に脅かされてゐたのであります。そこで、フィリッピンと日本との間の貿易は益ゝ盛大であつたに拘らず、カソリック教の僧徒にして、日本船によつて我が國へ侵入せんとするものも多かつたので、寛永

元年（西暦一六二四年）に至つて、この通商も亦絶えたのであります（外交志略）。江戸幕府はスペイン人は宗教を日本に弘め、そして日本を併呑せんとするものだと思ひ、ポルトガルもその隣國なので同じ疑を以て見ることになり、遂に彼等の入國を禁止するに至つたのであります。オランダは、本國ではカソリック教を敵視するといふことを聞いて、江戸幕府は、オランダ人だけには、通商のため陸地に近き一島に住むことを許したのであります。

一方、カソリック教徒が、常にフィリッピンより我が國に侵入を企て、ひそかに日本の歸帆の船に乘込んで來て上陸しようとするものなどもあり、發見されて死罪に行はれれば、これこそオランダ忠節だと言ひ習はしたといふことであります。

耶蘇教禁制

二代將軍秀忠が、カソリック教徒を拒絶するに當り、決してこれを輕忽にしたものでないことは、天主教の法の善惡を研究するため御側に召仕はれた掛斐半右衛門といふものを九州に送つて、七年間、キリスト教を學ばしめたといふのであります。そして歸つて來ると、秀忠は半

右衞門に、くはしくおたづねになり、三日の間夜半までつづいたので、或人が御退屈でありませうと申したところ、半右衞門は、そのため七年も遠國にゐたのである、僅か三日五日に何ぞ退屈すべきやといはれたといふのであります。そして、禁制いよいよ嚴重となりました。半右衞門がしらべて來たことは、井上筑後守に傳へよと仰付けられ、カソリックの大意と、宗門のものを吟味すべき仕法等を口授せられたといふのであります。「耶蘇宗門禁制大全」に、蒲生氏鄕の舊臣井上清兵衞政次、後筑後守と號す、元來吉利支丹宗門なりしが改宗故、其筋を能く存知してゐるとて召出され、吉利支丹奉行に仰付けられた、とあります。同じ書物に、キリシタンの宗門をひろめるためバテレン（葡萄語、Padre 父の義、昔、キリシタン宣教師の稱號、その次なるを以留滿—兄弟の義—といふ、同宿は修行者のこと）を遣はし、宗門が盛んに行はれた時分に、軍を出し、日本の他宗を打平げ、ローマ法王に從へんといふ策略で、先年キリシタン宗門を弘める時のごとき、日本の佛敎の出家たちに、金銀を出し、キリシタン宗門に致し、その外、日本のイルマン、同宿を諸寺諸山に遣はし、學問を致させ、佛法神道の極意を習取らせ、これを南蠻口に引直して出板し、國々のバテレンに遣はし、學問をさせるといふ仕方で、何のためにも、

日本に法を弘め從へんとのたくみに候事、井上筑後守、といふことも見えます。これは寛永八年のことでありませう（耶蘇天誅記）。かくして江戸幕府は、海外居住の日本人にしてカソリック教徒になつたものが日本に歸つて來てその敎を弘めることをひどく畏れ、その入國禁止を嚴重に取締つたのであります。

長崎には左のごとき制札が立てられることになりました。

一、伴天連日本へ乘渡事

一、日本の武具異國へ持渡事

一、奉書船の外、日本人異國へ渡海事

附日本住宅の異國人同前事

右條々於違犯之族者速被處嚴科者也

寛永十一年五月二十八日

政府はかくのごとく、海外往來の制をいよいよ嚴重にしたのでしたが、當時島原の領主に松倉重政といふ人がゐまして、フィリッピン群島を取つてこれに占據し、以てスペイン人の來る路

奉行

をふさいで了はうと考へ、家人吉岡九左衞門、木村權之亟を商船に乘せ、フィリッピン群島に遣はして、經略の計畫を定めしめ、その計畫既に整つてから江戸幕府に請願したけれども許されずして數年を經過し、僅かにこれを許容した時は、重政が病死する少し前でありました。まことに惜しむべきことであります。もしその許容を早く與へたならば、成功したことは疑ないのであります、もし、「この計畫にして成功せしめば、我が國の前途豈に鎖國の必要を生ぜんや」

耶蘇宗門禁制大全　重政天然武の嗜厚くして、武功の家人多く、扶持せしめ、鐵砲も三千挺程所持し、玉藥其外武具兵粮等に至るまで、平生心掛無油斷、或時家人吉岡九左衞門、木村權之亟を商船に乘せ、呂宋國へ遣し、彼國の樣子、得と聞屆け、重政言上せしめけるは、南蠻西洋より本朝へ來るには、必ず呂宋に著岸候間、某一分の人數を以て、呂宋を討取、則、在番の者を差置き、南蠻の足掛りを指止め候はゞ、永く本朝の御安堵にて御座有べく候、於御免は、呂宋へ押渡し退治可仕候。依之、其領内草高十萬石の御朱印被成下候樣にと奉願處に、從公儀無用とも不被仰出候へ共、願之通被仰下も無之、但し重政向後六萬石の軍役相勤の旨被仰付被差置候内、寛永七年十一月十六日病死す

薩翰譜（新井白石著）、此時呂宋に使せしは、吉岡九左衞門、木村權之亟と申、木村彼國に病死し、吉岡かしこにとゞまること五ケ月にて歸りしに、重政は去年冬死したれば、其事むなしく成たり、吉岡等長崎を立ちしは、寛永七年十一月十一日、歸りしは同じく八年六月なり

かくして呂宋經略の策も止み、この上は、我が國を鎖國するより外、カソリック教徒を拒絶する法はないと考へるやうになりました。いろいろ嚴重な制度も、實際にはその目的を達することが出來なかつたので、いよいよ鎖國と定め、五百石以上の船舶を破毀し、二檣以上を禁じて一檣となし、その船底の縱骨を廢するといふ方法を以てしたのであります。かういふ小船では、到底遠くへは行けなかつたのであります。

當時異國渡海の禁は、次の如きものでありました。

定

一、異國へ日本の船遣候義堅停止の事

一、日本人異國へ不可遣候條、忍候て乘渡候者於有之者、其身は死罪、其船若船主とも留置

可言上事

一、異國へ渡り住自宅仕日本人來候はゞ死罪可申付事

一、切支丹宗旨有之所は從兩人可被遂穿鑿事

一、切支丹訴人褒美の事、伴天連の訴人は其品により三百枚或二百枚たるべし、其外は此以前の如、相計可被申付事

一、異國船申分有之て、江戸へ言上の間は、番船の事、此以前の如く大村へ可申越事

一、伴天連法弘候南蠻人、其外惡名之者有之時は、前々の如く、大村の牢に入置べき事

一、伴天連の義、船中改迄入念可申付事

一、南蠻人子孫日本に不殘置候樣可申付事、若令違背殘置輩於有之者、その者は死罪、一類の者科の輕重により可申付事

一、南蠻人長崎にて持候子供、幷に右の子孫の內、養子に仕候族の父母等、悉く雖爲死罪、身命を助け南蠻人へ被遣候、自然、彼者どもの內、重て日本へ來歟、又は書道於有之は、本人は勿論死罪、親類以下まで隨科の輕重可申付事

一、武士の面々、於長崎、異國船の荷物、唐人前より直に買取候義停止の事

一、異國舟積來候白系直段を立候て、不殘五ヶ所其外書付の所割合可遣事

一、糸の外、諸色の直段極候ての上、相對次第商賣可仕、但し唐船は小船の事に候間、見計可申付事

附り、荷物の代物直段立候ての上、可爲二十日切事

一、異國船戻りは九月二十日切、若し遲來船は著候て五十日切、但し唐船は見計カリウタより少跡に出船可申付事

一、異國船賣殘の荷物預置候も、又預り候義も停止の事

一、五ヶ所總代の者、長崎參著候義可爲長月五日切、夫より遲く參候はゞ、割符をはつし可申事

一、平戸へ著候船も、長崎にて直段立候はぬ以前に賣買停止の事

以上

寛永十三年五月十九日

加賀守

榊原飛驒守殿
馬場三郎右衛門殿

豐後守
讃岐守
大炊頭

鎖國令

異國渡海の禁があつてから働き掛けの貿易を失ふことになりました。それから幕府の反キリスト教政策に不滿を抱いた肥前島原肥後天草の信徒は寛永十四年（西暦一六三七年）に、島原の亂を起し、十五年二月に鎭定しましたが、幕府のキリシタン取締愈ゝ嚴重となりポルトガル人に許したカリウタ船（小船）の來航を禁じて、寛政十六年七月、外國貿易を禁じ、オランダ人と支那人とにのみ通商を許すことにしました。これが所謂鎖國の令といふものであります。今まで、さしもに盛んであつた貿易は、全く衰へるに至りました。鎖國の令があつて以來、從

來ポルトガル人の貿易によつて利益を得てゐた長崎は、全く衰微して寂寥となり、幕府の收入が著しく減少したので、遂に平戸港を鎖して、從來平戸に開始されたオランダの貿易を長崎港に移さしめたのであります。ここに於て歐洲貿易と與に興つた平戸は、歐洲貿易と與に衰態を呈したのであります。蓋しオランダ人が平戸に來て以來數十年、オランダ人の貿易は愈ゝ繁榮に向ひ、オランダ人と領主とは「相互の利益に於てもまた密接の關係を有したれば、相信用し、相信賴して、我國の貿易が日々國難に赴くの日に當り、僅かに一線の活路を求めて其危急を免かれしは、左の二書によるも亦た之を知るに足る」

尙々船作事の儀少相待候て尤候但破損の所は最前被御免候條無申事候、併竹中采女殿被罷下候間、萬事得御意可然候　以上

五月廿八日の書中、殊珍敷挑燈送給一入にて滿足候、其上酒肴到來候、次に其方身の上の儀、隨分無油斷、御年寄衆へ申上候へ共、島彈正殿御煩故、はか不參候、其上我等事も、此中氣分惡候故、御年寄衆へ參會不申、遲々候、併近日可相澄候條、可心安候、委細は「コモタラル」所より可被申越候、手前指合義にて書中大方に候、恐々謹々

六月廿二日

オランダ「カピタン」

コルネイレ殿

松肥前守

隆信

七月七日の書中披見候、ジヤガタラ出しの船一艘著岸の由、滿足察入候、荷物の注文同前に御年寄衆まで遂披露候

一、案書遣申候爰元奉行衆長崎奉行衆へ急度書狀指上げ可然候目安の樣に書上げ候へば、又オランダ出入も候哉と、自他の外見も惡敷候間、ケ樣に仕らせ候、隨分各爲に成候を情に入候條、可心安候、其方フランス逗留の間は、如在有間敷候

一、馬驢馬慥に相屆則上樣へ鞍道具共に置候て懸御目進上候處に、拙者へ則拜領仕候、先々預り置候、別しての仕分大慶不過之候、此段能々ジヤガタラへ申越可給候、前約束の軍の

樣子作り物片時も急てのぼせ可有候、御旅の御慰に、公方樣へ懸御目度、委細の虛大學所まで申越候間內々の談合は、其元奉行の者入魂候て、公儀外樣の分は、長崎御奉行衆の任御指圖候樣に、萬事心得入可申候、我等事、今度上り申候に、道中より煩出、其上老故、一圓無正復候、申付儀も萬事不成候、口惜次第に候、內々其分心得尤候、毛頭心底非如在候

一、又々船來候共、彌右の通に荷物注文計我等所へ遣候へ遂披露萬事は長崎奉行衆の御指引なるべし、心得尤候、恐々謹々

七月十七日

オランダ「カピタン」

ニコラスどのへ

返復

松肥前守

隆信

彞に、我が國はポルトガル人の雜居を禁じて、これを出島に居留せしめましたが、カソリッ

ク教の餘焔容易に撲滅に至らなかつたので、ポルトガル人の來航を禁じ、出島居留のポルトガル人をして、盡く我が國から退去を命じたので、出島は空屋敷となつて、長崎港の貿易は止んで了つたのであります。寛永十七年六月に、媽港に居留するポルトガル人たちが、また人を遣して貿易を恢復せんことを請ひましたが、當時我が國の政策は彼等を拒絶するに一決してゐたので、その使者を殺し、船子、醫師等僅かに十三人を放還したのでありました。そしてその際、媽港に書を致し、此方の嚴然たる態度を知らしめたのであります。その書には、媽港から事を商賣に寄せて、伴天連を雇ふ所の唐船の底に匿し、微服して郡國に潛行するは怪しからんことを述べたのであります。この書の終りには、「別造小舟、放還之、凡阿媽港近隣酋長、聞之者、宜仰本朝之德、以察武威之嚴也」とあります。

この慘酷な處分があつてから、我が國の諸港は、皆ポルトガル人の跡を絶ち、ただオランダ人のみは、そのカソリック教徒でないといふことで、我が國に來航するのを許されました。

平戸のオランダ人も長崎に移されましたが、「谷村友山覺書」によれば、オランダ人の貿易のため、平戸の殿樣は、「御大名樣方より御賴之諸色有之、其代銀滯り、殿樣より御償被遊候に付、

御金銀千貫目に及候由」、また平戸の侍衆は、オランダ人との關係で贅澤をしてゐて「花魁なりと江戸にて沙汰有之に付」殿樣は、御家來の御侍衆の大小の柄鮫までも銅の打鮫にするやうにとまで心をつかつたりしてゐましたが、「右の通に付、阿蘭陀人を御除被成度思し召、內々言上被遊候」のみであつたが、「何の序無之には御除被遊がたく」困つてゐたところ、寛永十五年島原歸陣の節松平伊豆守、平戸に來て見ると、オランダ人たちは、すばらしい石藏を作つたり、「フランス事驕を極」又、茶臼にした石を石疊にしたりして、「驕の至極と思召候との義に付其夜中に石藏を打こぼち候由、其故、右の通驕つのり候ては、末々覺束なく思召候由にて」、長崎へ引越仕樣とて仰渡されたとあります。「深江記」には、松平伊豆守が平戸へ立寄られ、火わざを是非見たいといふ所望があり、的を立てて火砲を擊つて見せたところ、伊豆守は驚いて了ひ、このままにしておいては「天下の御大事に候と言上有之」、そのため寛永十七年「長崎へ引移さる、此時阿蘭陀申候は、天下の御使と承、火わざ御所望に付、御馳走として、隨分入念御覽に入候處、夫故長崎へ御移し、數十年馴染の平戸を立去り候事、心外の至なり、此上は日本の逗留をもしろからずとて、我國へかへり、其後數年渡海せざるとなり、かくて公儀より平戸へ數

十年火藥名人の阿蘭陀來り候間、彼流傳統の者可有之傳へ候者は、一子相傳の起請文仰出さる」とあり、鎖國の影響は大きかつたのであります。「崎陽略記」に、「黒船御停止にて、此地の人民渡世を失し候儀を恤み思召して、多年平戸に來りしオランダの商船を長崎の津に至らしむべしと釣命あつて、寛永十八年より此津に渡海す、紅毛人平戸に來る始は、慶長二丁酉年五月にて、夫よりは絶る事なし」とあります。

當時の海南諸國へ往來した船が、非常に大きなものであつたことは、商船の大きさ長さ二十間、幅九間で、人數三百九十七人を乘せたといふことからも想像し得ることでありまして、その往復には蚊帳、扇子、傘、塗物、鐵砲、銅道具、刄物、織物、藥種、鮫、珊瑚樹、キヤラ、白檀、紫檀、皮類、器類のごときものを積んだのであります。乘組の客は一人前船賃銀五百匁を出し、貿易につとめたのであります。「長崎記」によれば、當時長崎の輸出入品は左のごときものであつたのであります。

輸出品

蚊帳　傘　紙張扇子　合羽　刀劍

銅器　藥罐の類　漆　塗　小麥類　蒔繪
紙帷子　水風呂　鐵器類　小刀　鐔
庖丁類　食器　木綿布子　鐵錢　椀
樟腦　屏風　疊

輸入品

白糸　金入ジユス　タビイ　シユチン　チヤ・ラ嶋
ドンス　カベチヨロ　シヤケン　コルブラン
サヤリン　リンズ　チリメン　ヂヤコフ
山歸來　鮫　水銀　木香　トタン
サンゴジユ　ハナ目鏡　インデヤ唐皮　朱

從來、長崎の貿易はポルトガル人に專ら占められ、平戸の貿易はオランダの左右するところでありましたが、我が國の國策が、オランダに對して親善であり、ポルトガル人を排斥することになつたので、長崎はさびれて了つたのであります。それで、江戸幕府は、長崎の收入は江戸

の收入なので、長崎がさびれては直ちに幕府にひびくので、幕府では平戸の貿易を長崎に移さうとし、且つ取締の上からもそれが必要となつたので、遂にそれが實行されたのであります。ここに於て、歐洲貿易の起源と一緒に開かれた平戸港は、今や鎖國の令と一緒に廢絶に歸し、平戸が衰へると、さしもに隆盛であつた我が國貿易の氣運は全くその終局を告げたのであります。初め異國渡海の禁が出ると、海外に居住してゐる日本人で歸國するものがあればこれを死罪にする法を定め、且つ白人の種族に係る者及びその子を養子にした者を捜索して二百八十七人を得、これを媽港に放逐し、寛永十六年の島原の亂の後、長崎に散在してゐたオランダ人及びイギリス人の種族に係るものを捜索して、爪哇（ジャワ）に退去せしめたのでありました。

二百艘にも及んだ朱印船によつて行はれた貿易が如何に盛んであつたかは、前に申述べたとほりでありまして、同時に國内の商業も隆盛で、金銀の價格を維持して、これを我が國に停留せしめ得たのでありましたが、鎖國の後は、商業沈滯して、活潑な取引がなかつたので、金銀はその需要を減じ流通高を超過したのであります。

寛永十七年オランダから我が國に輸入した物品は、價格三百二十萬ドルで、我が國から輸出

した物品は、百二十萬ドルで、差引二百萬ドルの輸入超過でありました。これより後、日本の黄金小判は、金純二百二十四グレインの量目のものを、銀六テール以下でオランダ人が買つて印度に持つて行き、印度では黄金の價格が日本より高かつたので、印度で高く賣つて儲けたのであります。一年の間に、小判十萬枚を輸出して、百萬フローリンの利益を得たといふ風でありました。

當時の趨勢を察するに歴年の戰亂この間に至つて始めて平定し、天下の英雄またその驥足を伸ぶるの地なきに苦んだのであります。鋭鋒を轉じて海外に赴かんとすれば鎖國令がこれを禁じて居りました。もし當時風潮の向ふところに放任して、彼等にその志を達せしめたならば、東洋貿易の實權を日本が專有してゐたにちがひないのです。さきには唐制の模倣と文物の塗抹とによりて商業の進路を阻絶され、今や再びこの厄運に逢ふ。我が國民もまた不幸なる哉。然しながら、我が國民の性格は、常に冒險敢爲の氣象に富み、苟も時期あらば、直ちにこの鋒芒を現すにちがひないことは歴史が證明して居ります。三百年の長日月を閑過して世界の大勢に後れたが、一たび醒めて而して起るや、僅かに三十餘年の間に、一躍千里、忽ち頭角を現したの

はその證據であります。

愛國心

我が國は鎖國の夢を見ました。併し國を鎖して退守するは、日本國民の本色ではないのであります。これ、私が、我が國の商業史の中に、これを證據立てようとしたのであります。愛國心は、自國の歴史を知ることから生れるものであります。卽ち働き掛けの貿易を經營するには愛國心が基礎とならねばなりません。そのことが知られるならば、私が、この述作に從事したことも決して無用の業ではありますまい。オーストリアの歴史家ローレンツ・フォン・スタインが、東亞諸國の利益を歐洲の各列强に分配すること、並に各列强が太平洋に於て彼我の利益を爭ふことからして、いま既に太平洋政略は始まつたと見るべきだといつて居ります。この言葉を空中樓閣のやうに思ふ人があるかも知れませんけれども、苟も彼のニュー・ヘブリデース、ギニア、フィリッピン諸國の外交史を知るものは、この言葉の誤りでないことを知ることと存じます。自今太平洋政略に關係を持つ國は、從前のごとく英佛獨の三國に止まらず、北方から

は露西亞、東方からは米國もこれに加はるにちがひないのでありまして、その關係は、甚だ重大になるに相違ありません。その時になれば、米國及び印度に起つた事變を「今世紀に再演し、太平洋は歐洲各大國の雌雄を決するの戰場となるべし。是れ固より想像なるも、其想像の一は現に今實驗する所となり、歐洲の各大國が東亞細亞に於て何等の事を爲すも、又何等の問題を惹起するも、日本支那の兩國は始終其衝に當らざるを得ざるを見る。然り而して近く支那及び日本の國狀に就きて世上是非の論紛々たるを如何せんとするか。要するに、支那人の氣質は歐羅巴人と與に政略上の目的を達するに適せずして、獨り日本は其軍備の整頓と行政の發達とに依り、歐洲各大國と共に政治上の大問題を處理する能力を具有せり。此大問題の解釋は、果して何時に實行さるるや。又是等の場合に於て、日本は其地位、其港灣、其速に進步せし海軍、其能く一致せる强兵を以てせば、其一言は以て能く東洋の權衡を上下すべきこと疑なかるべし。吾人は敢へて、彼の歐洲各大國の如く、他人の國土を奪掠して自己の財囊を充たさんと欲するものにあらざれども、苟も商業を振起せんと欲するには、其進路に當れる障碍を切開くべき勇氣なからざるべからざるを知る。吾人日本人たる者、此一國興廢の時に際す。遠く往昔を顧み

て近く來今を思はざる可けんや」。將來必ずや太平洋は列國角逐の地となるにちがひない。歐洲の諸國が東亞で何をしても、その衝に當るものは日支兩國である。吾人は他人の國土を奪掠せんとするものではない。併し經濟的進出をするに當つては、その進路に當る障碍を切開かなければならない。今まさに、我が國興廢の時である。既往を顧みて、將來の策を立てなければならない。

附錄

ゼーランヂヤ城址に立つ

私が何かに興味を持つて調べたいと思ふといつも同じやうに他の人が同じことについて何か書いてゐてくれる。今度、郵船にとうから頼んでおいた船室がとれたといふので、ゼーランヂヤ城（Fort Zeelandia）と、プロビデンジヤ城の城址を見ようとして、八月四日に東京港から、賀茂丸に乘つて出かけたが、家を出る時に持つて行つた「改造」時局版八月號に、幸田成友博士がゼーランヂヤ城のことを書いてゐるし、八月十六日に船が高雄に着いて同日臺南に赴き、臺灣拓殖の友人人事課長喜多收一郎君の友情と、高雄支店長坂井氏の好意で、自動車に社員一名をつけてくれて、臺南の地を見學することが出來たが、ホテルに歸つてその日の臺灣日報を見ると、「南方發展史、海の豪族」といふ見出しで、「日本が世界に誇る南進の先驅者濱田彌兵衞の

全貌を描く日活京都撮影所並に臺灣總督府共同作品、長谷川伸原作、荒井良平演出、東西日活總出演、――南方發展史・海の豪族――の製作を決定するや、臺灣總督府當局では、文教局の動員を行つて、この作品の資料調査、時代考證に當らしめることとなつた」とを報じてゐた。製作擔當者黑田氏、「本篇の主人公である濱田彌兵衞がオランダ人を向ふにまはして戰ひ、大和民族の武勇を海外に宣揚した安平のゼーランヂャ城址に立つには民族的情熱をもつて製作意慾をかり立てられたことであつた」と語つてゐる。

大正十一年から十五年に渉り完成した安平運河の岸には松の木に似た木麻黃といふ木が並木をなしてゐた。これは颱風を防ぐためであるさうである。運河には、やぶれやぶれの帆に風を孕ました船が一二艘上つてゐた。

運河の曲つたところに、小高い岡がある。ただ一つある。あとは平野であり、平野のつくるところ海である。この小高い岡がゼーランヂャ城址である。鳳凰木といふネムの樹のやうで、眞紅の花を叢生せしめてゐる大樹が、あちこちに蔭を作つてゐる。城址といふだけで、僅かに壁の一部分が殘つてゐるだけだと本にあつたが、一部分の壁が斷絶して散らばつてゐて、た

しかに、洋畫家の材料になる。壁の中に門をなしてゐるところも、昔のままである。石段を上ると、河も運河も一目に見える。「あの、白い波の立つてゐるところがありませう。あのところが、オランダ時代の港であつたさうです。山からどしどし大砂を流して來るので、川が淺くなつて港にならなくなつて了つたのです。」と私を自動車で案内してくれた臺灣拓殖の社員はいつた。そして見ると、ずつと左の方に見えるのが、今の港である。燈臺が見える。昔は繁榮した港であつたが、今は安平は、昔の面影はない。

岡の上には、展望臺があるが、それは今のものだが、展望臺に上る階段も昔のままである。この階段を上り下りしたオランダ兵がゐたかと思ふと、かういふ西洋の勢力が、ひたひたと日本に押寄せた時代が思はれる。

岡の上には根を露はにした榕樹の大木があり、何の木か知らないが、白い花を落してゐる茂つた木がある。清國時代の大砲が三門砲身だけが横へられてゐる。岡から見ると、清國時代、もしくはその前から、つづいてゐるかも知れない煉瓦作りの小家に、今も人が住んでゐる。漁村で、今は本島人が住んでゐる。

岡を下ると、その前に木造の建物がある。西洋の古い建築にあるやうに左右から上れる石階がある。石階の下には、室がそれからそれとつづいてゐて、蜘蛛の巣が張られ、恐らく貯藏のためのものであつたと思はれる。煉瓦を丸く積んだところがあり、のぞくと、地上と同じ深さしかない。きつと井戸を埋めたものであらうと思つてゐた。これが實は、プロビデンジャ城内にも同じ井戸風のものがあり、これが互につづいてゐた地下道で、鄭成功はこれを利用して攻めたといふ傳說があるさうである。併し城内に一二の井戸を設けたといふ記錄がある。その上にも鳳凰木が紅い花を强烈な日の光に輝かしてゐる。葉が青々として微風がわたるところ、しづかな眞紅の花が、却つて涼しいフレッシュな感じを與へる。

城壁は赤い煉瓦で積まれてゐる。臺北の博物館には、この煉瓦の破片があり、バタビアから當時持つて來たものだと說明してあつた。臺灣には汽車の窓から見ると赤い土の層が屢ゝ見える。煉瓦はかういふ土で作るのであらう。民家でも普通の土をかためて瓦屋根をかぶせた農家もあるが、赤い煉瓦の家が多い。

今年、この城址に濱田彌兵衛の記念碑が立てられた。彌兵衛の武勇傳は、まことにこのゼー

ランヂャ城内で行はれたのである。寛永五年の夏で、今から三百十三年前に當る。

極東に於ては、ポルトガル人が、まづマカオを根據地として活躍した。次いで極東に來たオランダ人は、マカオを攻略しようとして失敗し、澎湖島に根據地を求め、臺南の沿岸タイオワン島の北端に城を築いた。一六二四年に工を起し、一六三二年に成つた。これがゼーランヂャ城である。今は陸つづきにうづめられてゐる。タイオワンは臺灣の名の起る所以である。

この城が壞れてはゐるけれども、昔のままのものであることは、遊子の心に歷史の幽遠といふことを刻みつけた。一六七五年アムステルダム出版のC・E・S著「閑却されたるフォルモサ」に書いてある通りの城壁の厚さであることからも證明される。この著述は臺灣に於ける蘭人の活動を記し、鄭成功との關係から、遂に蘭人退去に至るまでのことを詳しく記したものである。この城のところだけが岡になつてゐて、他には岡らしい岡もない。附近には鹽田もある。暴風の時には、浸水することもあつたといふことである。バタビア城日誌の一六五六年十一月二十一日の項に、同年七月暴風あり、ゼーランヂャ城南三ケ所に海水の浸入したことを記してゐる。一六三一年六月五日附で、バタビア總督府からオランダ本社に送つた報告にも、「こ

の城の位置は不便だといふものもあるけれども、この附近には、これよりいいところはなく、城を見下すやうな砂丘は附近にない」とあるとほり、今日、この砂丘の外には岡はないのである。領臺當時のゼーランヂャ城址の寫眞を見ても、岡の形は變つてゐない。恐らくオランダ時代の形も　このやうであつたらうと思ふ。城壁はもつと規模が大きく、外部の城砦もあり、海から見て、堂々たる構へが一劃を作つてゐたことは、殘つてゐる繪畫によつて想像出來るけれども、この岡の上に立つて見た海、草原、川も三百年前と變りはあるまい。一六三二年に成れるゼーランヂャ城は、江戸に於て聖堂が忍岡に建てられた年であり、長崎に出島が築かれたのは一六三四年であり、江戸城惣郭造營が諸侯に課せられたのは一六三六年、その翌年一六三七年は島原の亂である。一六三二年は德川三代將軍家光の時代で、寛永九年に當る。ゼーランヂャといふのは、ネーデルランドのゼーランド州の名を取つたもので漢族は、紅毛城、赤嵌城、安平城などと呼んでゐた。

寛永五年の濱田彌兵衛の物語は、あまりにも有名である。齋藤拙堂の「海外異傳」に記されたる文章は、菅沼貞風の「大日本商業史」にも引用されてゐる。

臺灣在支那東南海中。古無聞焉。明天啓初、海徼人顏振泉聚衆據之。招我邦邊民入其黨。因自稱日本甲螺。甲螺猶謂頭目。我日本謂頭目爲加志良。音近甲螺。故遂訛稱耳。先是、泉州人鄭芝龍、少流落。往來我邦。因入振泉之黨。及振泉死、衆推芝龍爲甲螺。雄視海上。後受明將之撫、去閩中。我邊民代之爲甲螺。而紅毛夷來借地。約歲輸鹿皮三萬。既而築城郭據之。役使土人如奴隸。不復輸幣。且我商船往印度者。過其近海。爲破殺掠。甲螺不能如之何。適本邦商人濱田某至。衆交訴之。圖報復。某許之。某字彌兵衛。長崎人也。勇而有謀。弟某字小左衛門。子某新藏。並有膽略。力兼數人。乃與甲螺之黨二十人。還清之大府。大府允之。檄長崎代官末次平藏。備船募卒。附之於彌兵。彌兵盡裝其從兵數百。爲農丁。被蓑笠。持鍬钁。行到臺灣海口。請於守吏曰。日本之氓。即臺地土廣人寡。中多萊蕪。欲移住以開墾之。守吏以告甲必丹。弗信。以哨船圍之數重。不許上陸。使人來言曰。汝之來。決非好意。不然何從人之衆也。彌兵曰。唉公何疑人之甚耶。假使日本欲略海外之國。當遣猛將精兵。來。日本素不乏其人。爰使我儕小民之爲。守吏檢舟中。僅有數十副防身刀。其他唯有耕耨之具而已。還備告甲必丹。甲必丹意稍解。乃

許レ衆登レ陸。彌兵等得ニ入レ城謁ニ見甲必丹一。請ニ受レ廉爲レ氏。弗レ許。請レ還ニ本邦一。亦弗レ許。留數月。屢入請レ之。甲必丹依違不レ答。彌兵謂レ衆曰。甲必丹不レ許ニ我去留一。其意不レ可レ測也。大丈夫入ニ不測之地一。當ニ死中求一活耳。衆憤然欲レ死レ之。一日昧爽。彌兵父子。兄弟三人入レ城衆從レ之。留レ於ニ門外一。三人挺レ身排レ闥而進。甲必丹猶寢在レ牀。驚起叱曰。汝等入ニ人閨閤一。何無禮也。彌兵咆哮奮前。擒ニ甲必丹於レ牀。懷出レ七首一。擬ニ其喉一曰。汝有ニ死罪一。尙何咎ニ人之無禮一耶。左右欲レ刄レ之。小左新藏拔レ刀遮立。瞋レ目叱レ之。左右披靡不ニ敢逼一。甲必丹惶急。乞ニ饒命一甚哀。彌兵曰。汝欲レ生。何不レ停ニ城上放レ礮一。甲必丹曰。謹奉レ命。曰。汝嚮所レ掠之貨。倍レ數還レ之。甲必丹曰。唯命之從。兵聞レ變走入闘レ於レ庭。其後入者爲ニ礮被レ傷。彌兵乃左手扼ニ甲必丹之臂一。右手執レ七首一俱起。小左新藏擁ニ其前後一而出。夷卒不ニ敢動一。甲必丹傳ニ命停一放礮一。令ニ其卒艤ニ蠻船一隻一。及日本船二隻一。裝レ貨山積。彌兵入而檢レ之。乃欲下拉ニ甲必丹一俱去上。甲必丹曰。島民皆仰レ某指揮一。某去則倀倀乎無レ所レ歸焉。某有ニ一兒一。年十二歲。願代レ某從去。公平垂ニ愛憐一。使ニ某全ニ父子之情一。非ニ敢所レ望也。彌兵許レ之。乃質ニ其子及頭目數人一。歸ニ報於ニ鎭臺一。鎭臺稟ニ大府一。厚賞レ之。於レ是。彌兵之名震ニ一時一。肥後侯聘而祿レ之。時寛永五年也。後三十餘年。

鄭成功攘ニ紅毛一。復ニ臺地一。

更に齋藤拙堂の文は、またよくドラマのやうに鄭成功の武勇を描き出してゐる。彌兵と漢文にはあるがこれは勿論彌兵衛で、アムステルダムで出版されたファレンテーンの「新舊東印度誌」（全八册、一七二四年から一七二七年にわたり出版）には、ヤヘウェと書いてある。この著者は、臺灣には來たことはなく、東印度諸島に來てゐた人で、この本は早く我が國の蘭學者の間では讀まれてゐたものである。中に濱田彌兵衛等オランダ太守ノイツに迫るの圖がある。彌兵衛等がオランダ太守に迫れる一室の外には、一人の導くに從つて、劍を拔いた二人の兵士と、劍に手をかけた一人の兵士がつづき、廊下には殺到する多くの兵士が何れも劍を振り上げてゐる。服裝は何れもハムレットのやうな短袴で、黑い鍔廣の帽子をかぶつてゐる。劍は反つてゐる。室は、天井が高く壁が厚くて、室と室との間は、アーチ形になつてゐる。オランダ太守ノイツの子、ラウレンスは、その後、ノイツが一六三二年九月日本に到着した時には、既に大村の牢屋で、三年前に病死してゐた。日本ではゼーラーチャ城の引渡又は破壞を要求し、ノイツが日本に來ると、平戸の町外れに幽閉されて了つた。オランダの船の來る毎々、ノイツの釋放方を

歎願したが許されず、寛永十三年（一六三六年）オランダから日光廟に、青銅の燈籠の獻納があつた時、家光は非常に喜び、ノイツは釋放され、五年目に自由の身になり、一六三六年の十二月、バタビアに歸つたのである。

その後、我が邦人はあまり臺灣に赴かなくなり、オランダは三十年間にわたり臺灣をその手中に收めたが、鄭成功の出現により、遂に蘭人は撤退することになつた。鄭成功、歐洲人にも國姓爺として知られてゐる鄭成功卽ち國姓爺は、（Sketches frpm Formosa, V. Campbell.）海上よりゼーランヂャ城に迫り、一六六二年城遂に陷つた。國姓爺は臺灣に在ること一年にして、三十九歳で病死し、その子孫が三代二十一年の間、臺灣を保有してゐたが、清國の領有となり、更に二百十二年の後、明治二十八年五月近衞師團臺灣上陸、同年十月臺灣略平定、北白川宮能久親王臺南に御着の間もなく薨去あらせられた。

ゼーランヂャ城址を去つて、支那町の中心にある赤嵌樓を見る。これがオランダ築城のプロビデンジャ城の城址であるといはれてゐる。城は寛文元年に建てられたもので、後破壞され清の光緒五年（明治十二年）舊址に就きて文昌閣や海神廟が建てられた。樓の赤く塗られた柱

は白蟻に侵されて改裝を必要としてゐる。全然支那風の建築で、賴んで中に入れて貰ひ、くらい階段を上ると、樓上に出た。涼しい風が吹き過ぎてゐた。當時の支那人の詩に、（陳輝、乾隆三年の科擧の人）渡安平として、碧流春色海天寬、島嶼蒼茫雨後看、半棹斜翻雲影碎、片眺遙送浪花殘、沙浮曲岸漁人宅、樹蔭孤村戰將壇、曾是昔年歌舞地、空城寂々暮煙寒とある。見渡すと、臺南全市の瓦の波が見え、あちこちに靑々した榕樹の繁茂が臺灣の感を强くさせる。ゼーランヂャ城のあたりも、遙かに見ることが出來た。この赤嵌樓の地が果して昔の赤嵌樓であつたかどうかについては、それを疑ふ研究もあるけれども、私は兎も角も、昔のままであるといふ城の基礎（バタビアから取りよせて煉瓦を牡蠣灰で接合したもの）を見て外に出た。この赤嵌はもとサカム（Sakum）といはれ、その音譯であり、オランダ時代そこには新港（シヌカフ）蕃社あり、同一根源から出た二つの名が、赤嵌は城の名として用ひられ、新港は蕃社の名として用られた。オランダもまたスペインやポルトガルと同じく政治と共に宣教を忘れなかつた。臺灣へ最初のキリスト教の宣教師ジョージ キヤンディディウス（George Candidius）は一六二七年五月七日にバタビアから來て、新港土人の間にキリスト教を弘布し二年の後には

七百人の信者が出來たといはれてゐる。キヤンディディウスがバタビアを去る時には、人深く氏の去るのを悲しんだといはれてゐる。

赤嵌樓の前は、日本の海岸の町にあるやうな狹い勾配を持つた坂道で、門の前には、むさくるしい煉瓦の家が並んでゐた。あの中にゐたら、さぞ暑苦しいだらうと思ふが、その中で本島人は働いてゐた。一坪ぐらゐの家も少くはなかつた。日の光を避けて、くらくなつてゐた。暑さは、內地の殘暑のやうであつた。孔子廟を訪れると、あたりの土地に綠蔭を作る榕樹の中に、眞紅の花の鳳凰木が混つてゐた。蟬の聲が夏帽子の上から雨のやうに響いた。

長崎

船の旅ほど、なつかしいものはない。今年の東京の夏の暑さは、私に、しきりに船の旅を思はしめた。私は夏が近づくと丸ビルの郵船のオフイスに、友人のホキウットマン研究家である長沼重隆君をたづねて、秩父丸の日どりをたづねたりした。そして、私は、晴れた夏の朝、横濱から秩父丸に乘つて、神戸に行き、そこで日支連絡船の上海丸に乘りかへて、長崎に行つたのである。途中瀨戸內海の景色の　つくしさは、遂に私をして、携へて行つた近刊書を讀了せしめなかつたほど、私は始終、甲板をぐるぐるまはつたり、左右の甲板に椅子をうつして、島島の影を送り迎へたのである。秩父丸には、ハーヴァード大學教授で、チベット國境の支那の旅に上る人と幾度か語り暮したが、上海丸にはさうした人もなく、ただ景色ばかりが私の心をとらへてゐた。

長崎は、私の最初の訪問であつただけ、すべてのものが私には珍しかつた。七代まで支那か

ら名僧を迎へた寺の座敷でいろいろの唐畫を見せられた。この寺は、支那人によつて開かれたもので、代々迎へられた支那僧描くところの繪が多く保存されてゐるのである。堂前の小徑に草青く、低い練塀の上に、長崎の港が白く見えるのである。堂には關羽の像や媽祖が祀つてある。この媽祖の像は、支那から船に積んで來て、多くの支那人が車に乘せて、岡の上の彼等の支那寺へ運んだものの一つが殘つてゐるのである。

長崎への船の旅では、暑さを忘れたが、市の圖書館の書庫に入つてゐる時の暑さはたとへやうがなかつた。そこでは、貴重な文獻の幾つかを見た。シーボルトに關する、すばらしいコレクションがあつた。古い出島蘭館の地圖も見ることが出來た。切支丹宗徒の手紙も收藏されてゐた。これ等の間にゐる私は、流れる汗に苦んだ。

雲仙で、漸く私は暑さを忘れることが出來た。ホテルの窓から松林の香りが送られるところ、私は書棚から取出して來た近著の小說の頁をはぐつてゐた。室にあきればポーチに出て、花やいだ客の話に耳を傾けてゐた。客は全部上海、香港、マニラあたりから來た外人であつた。かうして長崎が支那文明の影響を受けた時代の姿を今にうつして、まざまざと見たのである。」

勿論今では、長崎は一層支那に近いのである。

長崎で大每支局をたづねると王精衞が來たけれど誰にも會はないといふ。私は彼の宿所である長崎ホテルに泊つて名刺を出すと、會ふといふので會見した。初めは日本の留學生二人を通譯させてゐたが、しまひにその通譯を去らしめて、英語と日本語とで四十分ばかり互に大東亞の理想を語り合つた。この時彼に會つたものは私一人であつた。(昭和四年)

マニラ日記から

日本倶樂部の私のルームからは、ラサレ大學の校舍と、太田興業の社宅のひろい構內とが見えた。いつも窓を開けて寢たので、夜が明けて眼がさめるとうつらうつらと、あかくなつた空が見える。立つて窓に立つと、ラサレ大學の敎室にはまだ人影も見えない。太田興業の社宅の椰子の樹が少しばかり風にうごいてゐた。マニラに着いた翌朝は馬鹿に窓の貝殼をおもしろく見てゐたが、もう幾日かたつた。その貝殼も別に珍しいとも思はないやうになつた。二十年も前に、親類のものが外交官となつて、初めてマニラに赴任した時、マニラから貰つた寫眞を思ひ出したりした。その一つに日本のお寺のやうな障子を後ろにした部屋があつた。その障子の明り取りは、貝殼であつたのだ。室內の洗面臺で顏を洗つてゐると、お寺の鐘が鳴り出す。やはり舊敎の盛んなところだなと思つたりする。電車の音がして來る。ここはマニラ市のはづれだが、だんだんざわついて來る。十五年も前に、桑港に上陸して、翌る朝目がさめると、電車

の音がいきなり響いて來て、活氣ある市の有樣を印象づけてくれたことなど思ひながら、暫くはデスクの前に坐つてゐた。一月は、常夏のマニラでも、俳句の季なら冬に屬するさうで、朝風はすがすがしかつた。デスクの上には、日本へ出す繪ハガキが山のやうに積んである。明日の晩するラジオ放送の原稿も、もう一度讀み直すために、忘れないために目につくやうに置いてある。日本を出る時は、胃がわるくつて元氣がなかつたが、マニラに着いたその日からすつかり元氣になつて了つた。白い麻の服に着かへると、一としきり、ラジオ原稿に手を入れた。

そのうちに、ボーイが朝の英字新聞を持つて來る。大きな椅子へ座を移して、二三種の新聞に讀み耽る。徐州會戰前で、次第に日本陸軍の南北からの包圍陣が狹められつつあることを報じた米國聯合通信の記事が載つてゐる。きのふ支那町で、支那人が持つてゐた支那新聞に大きな活字で、デマニュースが揭げられてゐるのを見て來たが、英字新聞には、デマニュースは餘り見受けなかつた。私は新聞の一束を片手にして下りると、學生たちも起きて來てゐた。朝飯後に、私はいつも戰場地圖を揭げて、皇軍の進展を語り皇軍の隆勝を相共に祈つたのである。

短波のラジオは倶樂部にもあつたが　それは倶樂部の大道寺主事の住宅の居間にあるので、一般の倶樂部の人は聽きもしなかつた。私だけは、日本のラジオニュースを聽きに行つたが、日本内地で聽くと同じ感度なので、日本にゐるのではないかと怪んだほどだ。近衞首相が微恙で閣議に出ないなどのニュースも海外にゐて聽いてゐると何となし心配になつた。

比島のパパヤのうまさはたとへるべくものもない。朝食にも、晝飯にも、夕餐には勿論パパヤがついた。舌の上にのせて齒でかむ時の、熱し切つた感じと、芳醇な味とは忘れられない。星ケ岡茶寮などで出るパパヤも、うまいと思つてゐたが、それはみな臺灣のもので、比島のと比べては、問題ではなかつた。倶樂部には時々新しい旅行者が見える。商船學校の練習船に乘つて來た學生なども見える。一日でも二日でも、さきに來てゐたものが、先輩顏してマニラの風物人情を語るのである。私は久しぶりで、アメリカにゐる時、紐育の公園などで旅行者の日本人からお辭儀されたりしても、大して興奮も感じなくなつた頃、歐洲にわたつて、一人のエトランジエーとして、逢ふかぎりの日本人すべてに話しかけて見たかつたことなどを思ひ出さずにはゐられなかつた。

倶樂部の庭には、大きなマンゴーの樹があつて、それに蘭が寄生してゐた。蘭は野生のままでは、ああいふ風に寄生してゐるのかしらなどと思つた。比島の蘭は、中々いいといふことも聞いてゐた。庭の青々した芝生のところどころに鉢の蘭の花が咲いてゐた。

南洋にうれしきものは蘭の花

マニラに來て俳句を少しばかり作つたが、その一つはこの蘭の句であつた。私は、この句をいろいろの機會に書いた。自由に足をのばしたや　になつてゐて、可愛い薄紅い花をつけてゐた。烈日の下、芝の青いのと對照して旅行者の心をたのしませた。歸る時には、蘭は必ず買つて歸らうと思つてゐた。ヴエランダの外に、蘭の花の鉢があるなども、たしかに氣持の爽かな風景だ。椰子の樹が並んで、門からのアプローチを作つてゐた。丸い實がたはやかについてゐた。見てゐると、何といふことなしに、一つ二つと數へて見たかつた。暑いと思つても椰子に風の渡るのを見てゐると爽快な氣持になつた。夕立の中の椰子の林は、まことに南國的であつた。マニラから數時間自動車を走らせて、マニラの比島國立大學の農科大學に、臺北大學の田中長三郎教授が來てゐるのを訪ねる目的で、ロスバニョスへ行つた時は、ひどい雨で、觸目す

べて椰子の林、地平線はひくく、いくつかの村落を過ぎて行く時は淋しかつた。ロスバニヨスの大學構内は、茂つた樹と、紅い花と、青い芝と、小鳥と、校舎と、學校と、谿谷と、岡とで明るい感じで充ちてゐた。大學に着いた頃雨はやんでゐた。ロスバニヨスはラグナ湖畔であり、このラグナ湖の波打際に、日本人の溫泉旅館がある。この旅館に田中博士は滯在してゐられた。相共に同旅館に赴いて、同行のマニラ西本願寺布教使であり、日語學校長である山之内秀雄氏と晝飯を食べた。晝飯の後、私は溫泉に浴した。家の一隅に石でたたんだ、十五疊敷ぐらゐの浴泉がある。黑ずんだラジウムである。山間の岩の間の浴泉に身をうづめてゐる感じだ。

ラグナ湖は、渺茫たる湖水で、その昔マニラ灣に漂着したものは、このラグナ湖に入つて來たものと思はれた。このあたりを發掘したら、或は日本からの漂流民の遺物なども發見されはしないかと思つた。

夕方になると、倶樂部のヴェランダで、大きな椅子にうづまつて、歸る日の近づくのを數へてゐた。天井に鳴くのはやもりである。はじめは小鳥かと思つてゐた。見ると象牙細工のやう

に白い小さなやもりである。

小鳥かもやもり鳴くかとたづねけり

夜になつて、「エスコルタ」まで出かけることもある。「エスコルタ」は、マニラの銀座八丁である。スペイン領有時代の、スパニッシュ風の店がつづいて、日本品と、米國品とを賣つてゐる。日本人の大きなバザーもある。比島の女たちは日本人のバザーに來て、あれやこれやと化粧品や、子供の洋服などを買つて行く。店の日本人は、マニラ地方の方言タガロッグを話して商賣をしてゐる。日本人には中々外地發展の力があり、素質があるなと思つた。「マガンダン・ウマガ」(お早う)などは、旅行者が誰でも、すぐ覺えるタガロッグである。今からちやうど百年前、鴉片戰爭時分、英國勢力が支那に根を下さんとした時分に、天保十二年、仙臺から比島に漂流した觀音丸の水主たちが書き殘したマネラ言葉の中には、今日のタガロッグに見出せないものもある。「犬」を「アヤム」としてゐるが、今日の比島方言はタガロッグにしても、他の方言にしても、「アソ」である。ところが、私の集めたビコル方言集に、「アヤム」とあるのを發見した。この水主たちは、カベテを經てマネラに來て、それから舟山列島に來て、長崎に歸つ

たのであるが、その間二年を閲してゐる。舟山列島に來たら、「お前はどこか」など、唐人どもに日本語で話しかけられ、町には昆布や椎茸などを賣つてゐて、長崎に歸つたのかと思つたさうだ。「イギリス人兵亂後にて、大筒にて打崩候家跡、海邊に度々相見え申候」と觀音丸呂宋漂流記には書いてある。ここは、長崎との間を常に往復する唐人多く、その好意で長崎に歸つたのである。

この話の中の「カベテ」といふのは、キヤヴィテで、海軍の要塞がある。ここに今、アギナルドが老年を養つてゐるが、一八九八年比島革命發祥の地である。そのあたりがサンセット・ベーで、その夕日と夕燒の美しいことといつたらない。行けども行けども、椰子の林のうしろは、燃えるがごとき夕燒である。キヤヴィテの町で、自動車がパンクして待つ間、町の街路まで赤く染めてゐた。「街に雨ふる、心に雨ふる」といふボードレールの詩があるが、「街に夕燒す、心に夕燒す」といふ感じである。

夕燒やキヤビテの町を一とめぐり

マニラから八時間ばかりかかるが、バギョーに行かなければ、日本に來て日光を見ないやうなものだと聞かされた。私はバギョーには、どうしても行かうと思つた。そしてたうとうひとりで出かけた。途中の景色はただ田圃ばかりで、あきあきしたが、それでも携へて行つた本を讀む氣にはなれなかつた。椰子の林は至るところにある。山が遠くに見える。白鷺が飛んでゐる。水があれば丸木舟が泥舟のやうになつて浮いてゐる。町に入ると、驛にはごたごた人がゐる。椰子の實を澤山列べて賣つてゐる。若い男が殼をたたきつけて割つて中の水をのんでゐるものもある。

いやにモダンボーイ風の若者が、シガーをくはへてゐる。シガーは安いからざらだ。女でもシガーをのんでゐるのがある。バギョーは比島といふよりもアメリカだ。非常にきれいな避暑地で、四月、五月はマニラの極暑で、富裕な階級は、みんなバギョーに來るのである。バギョーには、日本人の大きなバザーがあり、また日本人の農場もある。私はバギョーの日本人小學校を訪れたが、中々規模も大きく、可愛らしい少年少女に取卷かれて寫眞を撮つて來た。マニラ市の日本人小學校には十六名の教員がゐたが、ここには、それほどではないが、校舍はマニラ市のものよりいいと思つた。バギョーは三葉の松が全山を蔽ひ、風光日本のごとく、そぞろ

に遊子をしてかなしましむるものがある。比島運動協會の好意で陸軍中尉のスポーツマンがすべて案内してくれた。マリヤ像のある山の上まで、幾百階の石段をのぼつたりした。

舊教の信仰の熱烈だつた當時を想像した。日本に切支丹が來たのは、この南蠻のコースによるもので、私はそのところにゐるのだと思ふと、若し私がキリスト信者であつたら、どんなに感激するだらうと考へたりした。中尉と共に夜食の後、二人で映畫を見てホテルに歸つた。山上のホテルの一夜は恐しいほど靜かであつた。ホテルの室の中には、鏡が一つあるきりで、質素なスタイルが、一層淋しい感じを起させた。夜氣がひえびえとした。窓から外の人の話聲が聞える。何となく日本語のやうな比島語の調子もたまらなく淋しかつた。朝起きて食堂に出ると山上に咲く草の花が卓の上に楚々たる感じをなしてゐた。ホテルの客はたつた他に二組あるだけで、どちらも比島のもので、一組は若い夫婦だつた。その日の朝、私は中尉の世話で萬事賓客待遇を受けて山を下りた。（昭和十四年、「外地評論」）

菅沼貞風の墓に詣づ

昭和十二年の大晦日の日、私はマニラにゐた。朝十時に、東京日日のマニラ特派員大谷純一氏につれられて、マニラ郊外サンペドロ・マカチの墓地に、日本南進論の先覺者菅沼貞風の墓に詣でたのである。この貞風の墓に詣づることは、早稲田大學の故平沼淑郎先生から、私が日本を立つ時、頼まれたことなのである。先生と貞風とは、同じ頃、東京帝國大學に學んだのである。

サンペドロ・マカチに自動車を走らす途中には、フィリッピン獨立戰爭の時の戰場を過ぎたり、駐屯軍のゐるマッキンレー兵營の傍を通つたりする。日本の藁葺に似た農家が、初めて見る私には珍しかつた。その日は、マニラに着いて四日目で、初めて郊外に出たのであつた。

一二度、自動車は曲角を間違へたりしてサンペドロ・マカチの墓地についた。スペイン時代の石の壁をめぐらして中央に石疊が敷いてあつた。マンゴーの樹が、茂つてゐて涼しい風が吹

いてゐた。掘立小舍があつて、石屋が仕事をしてゐた。木の根つこみたいな木塊に、道具を突きさして、といでゐた。それは、砥石の代りであつた。墓石はかなり多くあつた。中には、何かの鑛物を含んでゐるやうな石もあつた。私は、日本を立つ時にマニラに行つたら、何か拓本を取るやうな古い石像のやうなものがあるだらうと、紙と墨とを用意して來たのだつたが、そんなものは何處にもなかつた。石がなかつただらうかとも思つたが、墓地に來て見ると、石がないわけではなかつた。

大谷氏は、幾度も來るので、すぐ私たちは菅沼貞風の墓の前に立つた。墓石は上部が圓味を持つた平なもので、フランス語で、スガヌマ・サダカゼと記し、更に一八八九年七月六日マニラに歿したこと、享年二十五歳であることを刻してある。その下に、大日本肥前平戸、紀元二千五百四十九年、菅沼貞風墓、明治二十二年七月六日歿と日本文で記してある。私は、寫眞を撮り、墓前に咲いてゐた黄色い野の花の一莖を取つて、平沼淑郎先生への土產とした。菅沼貞風歿後、明治二十五年出版された「大日本商業史、附平戸貿易志」は、貞風の世に殘した大著

であるが、それは、また氏の墓標でもある。この書に挿まれた氏のマニラにおける心のおくつき、サンペドロ・マカチの墓碑の圖には、墓前に二本の幼い木が植ゑられてゐるが、今はそれはない。墓の後ろをまはると、もう墓地の壁である。この墓地は英人墓地で、日本人の墓としては菅沼貞風の墓と三神敬長の墓があるだけで、私の行つた時は、三神氏の墓を日本人墓地へ移す準備をしてゐた。墓地の廣さは、日比谷公園の廣場ぐらゐしかない。

墓石にはサダカゼと佛文で記してゐるが、テイフウといふのが正しいらしいと大谷氏は語つた。それはマニラの日本人小學校に貞風の研究家がゐて、貞風の故郷、九州平戸の役場に問合せたところ、テイフウと假名をふつて來たさうである。これは、平戸にある墓碑銘を漢文で書いた漢學者岡次郎氏も、テイフウといふのだといつてゐられる。岡先生は、最近まで早稻田第一高等學院の教授をしてゐられたが、老齡で退かれた。平戸の方である。貞風は幼名は貞一郎といつた。貞風の家は貧しかつたので、郡役所で働いて、夜は松浦伯の舊藩子弟のために興した猶興書院で經史を講じた。最初、貞風はこの學校に入り諸老先生に就いて學んだのである。偶〻明治十六年、大藏省で貿易沿革史を編むに當り、史料を長崎縣に求めたところ、貞風は平

戸の資料を集めることを命ぜられた。後、氏の「平戸貿易志」の著ある所以で、而して、氏の「大日本商業史」も、これに原因を持つものである。

氏の研學は漸く認められ、松浦伯により、明治十七年東京に遊學することとなり、明治十七年九月、帝國大學に入りて古典科に學び、中村敬宇、島田重禮、三島中洲等に就いて益ゝ研鑽を深めた。そして氏の卒業論文が「大日本商業史」であつた。卒業の後、商業學校、今の東京商科大學に職を奉じ、「大日本商業史」を大成したのである。

貞風がマニラに赴いたのは、氏の南方貿易に就いての興味から抑止すべからざる熱情の結果で、友人齋藤坦藏氏から數百金を得て決行したものである。齋藤坦藏氏は、貞風と同じく古典科に學んだ人で、早稲田大學教授であつたが、數年前亡つた。貞風がマニラに赴いたのは明治二十二年四月で、マニラに在ること五ヶ月、一夜遽かに病んで、七月六日逝去した。享年僅かに二十五歳である。

貞風がマニラに赴いた時、居館を共にした福本日南は貞風最後の友人である。明治二十一年

日南を訪ふものあり、「其人を見れば、年紀正さに二十四五、軀幹短小なりと雖も筋力强健、事に堪ゆるの體を具し、眼睛偏睨すと雖も、敢爲の氣象は勃ゝとして眉宇に溢れ」有爲の青年たることを示してゐた。一揖の後「僕は平戸の菅沼貞風なる者なり」といつて、足下對外の事に志ありと、僕も亦足下と所感を同くする者なり、故に敢て來り訪ふ」と。かくして議論風發、言ゝ肺腑より出づるに、日南はその人を偉とした。貞風は「國威を立つる外交より先なるは無し」と昂然として立言した。

いよいよマニラに赴くに當り、貞風は流行病にかかり一時危かつたが、日南を訪れて是非とも先づ發して彼地に行かんといふ。日南は、貞風の顏色憔悴せるを見て、休養をすすめたが聽かなかつた。

貞風の死ぬる前の晩、三四の同人と一室に集つたが、貞風は頻りに人の生命に就いて語り、日本に歸つたら、必ず生命保險に加入する、人の命は全く朝に夕を圖ることが出來ないとしみじみといふので、日南は、「青山曠野豈好墓田にあらずや」といつて笑つたが、貞風は、自分が死んだら兩親を養ふものがない、舍弟はまだ幼少だから、といふので、日南は貞風の周到な用

意と孝心の深いのに感心した。

それから皆寢についたが、夜まだ明けざる頃、急に日南の室の戸を叩くものがある。いでて見れば貞風である。夜中から病で苦しんでゐるといふ。それから醫者をよんだり、看護につとめたけれども、旭日海面をいづる頃、貞風は遂にこの世を去つたのである。貞風は最後まで將來の南方策を說いて止まず、「福本君、何處に居るか、僕はもう見えん」といつて、永別の手を握つて、英靈は永へに去つたのである。

日南は後で、貞風は、さう身體が强健ではなかつたと、ふことを人から聞いたさうである。氏の負けず嫌ひが、その風貌をして强健に見せたのである。併し、氏の「大日本商業史」を見るものは、その努力に堪へる力の如何に大なるものあるかを思はざるを得ないのである。恐らく帝國大學圖書館にある所要の文獻をことごとく涉獵したのである。今日二十二三歲の大學生にして、よくこの六百三十三頁の著作と研究とを大成し得るもの果して幾人かある。この書の引用書目は、古事記、日本紀、古語拾遺、姓氏錄等から、正德院佛舍利略記、高麗史、明史、日本西敎史、ケムプヘル日本歷史、阿蘭陀流石火矢傳記等、實に百八十四種に及んでゐる。

同じく平戸出身の稻垣滿次郎氏宛の貞風の與へた手紙には「安南暹羅の如き緬甸天竺の如き之を恢復して獨立せしむるときは以て東洋の元氣を皷舞するに足るもの亦少からず候然れども是等は別に獨立の一國を組織すべき地にして……近來は貞風も支那との戰爭は好み不申候……我國にして東洋の盟主となりて安南以下の諸國を獨立せしめむとするに至れば英佛も又之を逐斥して新嘉坡の峽門は之を我國に占據せざるべからざる義に有之……是等の計畫は決して他人に委任すべき事にも無之候間何分にも生長を急ぎ自己の力量を以てこの事を起しまたこの事を收めむと存じ候……丈夫天下志四十未成家と云へる唐歌は古人の口吟する所なり若しこの歌の意を今日に實行するものとせば貞風の如きは猶十七年の修業時間あり、否三十餘年の修業時間を有し候著々歩を進め可申候」とある。明治二十年のものである。手紙の最初に「拜啓遠く言を小兒なる貞風に寄せられ其生長を促かされ候段萬謝仕候」とある。稻垣滿次郎氏は、この手紙を「大日本商業史」の卷末に揭げられんことを望み、「小兒なる云々の文字は當時往復の雜語に有之候」と日南宛述べてゐる。

稲垣滿次郎氏は、貞風の東洋策には「中に卓見」があり、「此志を以てマニラに遠征せられたるもの」としてゐる。貞風は、まことに日本南進論の先驅者である。

今日、貞風の「大日本商業史」が岩波書店から再出版された新聞廣告を見て、貞風の墓に詣でたる日を追懷し、今の時代に、貞風あらしめばの感に堪へないのである。

貞風の死んだ明治二十二年といへば、帝國領事館の開設され　のがその前年明治二十一年十二月二十九日で、初代領事は谷田部梅吉氏であつた。その後比島革命の氣運で物情騒然たるものあり、明治二十六年九月一時領事館は閉鎖され、日清戰爭後明治二十九年十月再開された。

貞風は、歐洲のアジア侵入、アフリカの分割、伊軍のエチオピア慘敗（一八八七年）、ブラジル革命、共和國建設（一八八九年）、獨逸のビスマルク群島占領（一八八八年）等の世界の風雲を醸した時代に、日本の外交の强化を叫んだのである。呂宋マニラに赴くに當り貞風が諸友に示した賦の中に、「西土密雲近雨期、恰是蛟龍飛躍時、苟能一變攻守勢　眞菲之麻足以繫日本之旗」の句がある。

「大日本商業史」の終の頁に、「今既に所謂太平洋政略の端緒を現したり、論者或はこの言を以て空中樓閣の如く思考するものあるべしと雖も、苟も彼の新ヘブリーデス、グイネア及びフィリッピン國の外交歴史を知る者は皆この言の誣ざるを見るべし。……自今この政略に干與するの國々には、曾に從前の如く英佛獨の三國に止まらずして、北方よりは露國、東方よりは米國も亦之に加はり、其關係は隨つて甚だ重大に赴くべし……此大問題の解釋は果して何時に實行さるゝや」と慨然として數百言を列ねてゐる。この明治二十一年の貞風の論稿が、まさに今日の情勢を暗示せるが如くである。サンペドロ・マカチの墓地烈日の下、大理石下に、この先覺者は靜に眠つてゐる。その夢果して平かなりや。貞風は、此處に永遠に葬られてより、日清戰爭、日露戰爭、歐洲大戰を經て今日に至る。

貞風の「大日本商業史」は當時存在した東邦協會に依り發兌されたるが、會頭は副島種臣、副會頭は近衞篤麿であつた。評議員三十八名のうち、現存せらるるもの僅かに三宅雪嶺、尾崎行雄、牧野伸顯、金子堅太郎氏等に過ぎない。

（昭和十五年十二月五日、故西園寺公國葬の日）

著者略歴

東京淺草に生る。淺草小學校、高輪中學校を經、五高に入學。家庭の都合にて東京に戻り、早大に入學。明治四十三年早大英文科出身。直にジャパンタイムスに入社。數年後東京日日に入社。紐育特派員となる。更に歐洲に赴き、大正十二年歸朝、英文日日を創始し編輯長となる。目下早大に英語、英文學並に英文ジャーナリズムを講ず。著書に「日本新聞發達史」(英文)、「洋學百花」等あり。

昭和十七年二月二十五日印刷
昭和十七年二月二十八日發行

南進論の先驅者菅沼貞風

定價五十錢

著者 花園兼定

發行者 東京市芝區田村町一丁目テキストビル
印刷者 株式會社日本放送出版協會
和田利彦

印刷所 株式會社日本放送出版協會印刷部

(東京府規格外許可
巳資紙規第五五號)

發行所 株式會社日本放送出版協會
東京市芝區田村町一丁目テキストビル
振替東京四九七〇一番
電話銀座七〇七・六二六六番

發賣所
本社
大阪市東區北久太郎町二丁目黑川ビル
振替大阪五五九二二番
電話船場三八九五番
關西支社
名古屋市西區御幸本町通四丁目
振替名古屋一九三三番
中部支社
電話本局三五七番
九州支社
熊本市上通町三丁目
振替熊本三〇〇〇番
電話八九六番

會員番號一二二五二八

版權所有

配給元 日本出版配給株式會社

ラジオ新書 既刊

（太字は文部省、文協推薦）

新四六判美裝 定價各册五十錢 送料各册六錢

- (5) **杉田玄白の蘭學事始** 板澤武雄著
- (7) **支那文化史觀** 出石誠彦著
- (10) **孫文の生涯と國民革命** 河野密著
- (11) **日清戰爭と陸奥外交** 深谷博治著
- (17) **澤庵の生涯とその思想** 伊藤康安著
- (24) **昔の南洋と日本** 板澤武雄著
- (29) 支那の口語文學 宮原民平著
- (31) イタリア史話 吉田彌邦著
- (32) **病氣の正體** 緒方富雄著
- (33) 澁澤翁と青淵百話 白石喜太郎著
- (34) 明治の文學 本間久雄著
- (35) 神國由來と日本籠のしるべ 河野省三著
- (36) 鎌倉幕府と江戸幕府 細川龜市著
- (37) 愼思錄より駿臺雜話へ 石川謙著
- (38) 日本固有法と憲法 藤井新一著
- (39) 概觀明治史 日本放送協會編
- (40) 吉野朝時代史通論 中村直勝著
- (41) 日本人の大陸發展史 高柳光壽著
- (42) 今後の中小商工業 日本放送協會編
- (43) 我が國體と世界新秩序 藤澤親雄著
- (44) 南方發展史 煙山專太郎著
- (45) 初期明治文學の輪郭 柳田泉著
- (46) 田口卯吉の日本開化小史 京口元吉著

- (47) 日本の風土・支那の風土 脇水鐵五郎著
- (48) 熊澤蕃山と佐久間象山 金子鷹之助著
- (49) 時局下の農業經營 日本放送協會編
- (50) 神道 河野省三著
- (51) 大南洋圏講座 日本放送協會編
- (52) クライストの愛國文學 川崎芳隆著
- (53) 町人思想と町人考見錄 三井高陽著
- (54) ハウスホーファーの太平洋地政學 江澤讓爾著
- (55) 二宮尊德夜話 石川謙著
- (56) 日本武將傳 花見朔巳著
- (57) 開國とペルリ 桑田透一著
- (58) 日本文學の眞髓 齋藤清衞著
- (59) **伊能忠敬の測量日記** 藤田元春著
- (60) 日獨交渉史話 丸山國雄著
- (61) ローマの文化 小林秀雄著
- (62) 熱血詩人ダンヌンチオ 黑田正利著
- (63) 標準語研究 神保格著
- (64) 聖德太子と十七條憲法 五十嵐祐宏著
- (65) 中世都市と近世都市 德増榮太郎著
- (66) 日本文學と佛教 阪口玄章著
- (67) 鎌倉室町文學と日本國民性 齋藤清衞著
- (68) 陶淵明の詩 佐久節著
- (69) モラエスの日本精神 花野富藏著
- (70) 南米の經濟地理 飯本信之著
- (71) 國語の變遷 金田一京助著

（以下引續き刊行）

289
Su25
3

終